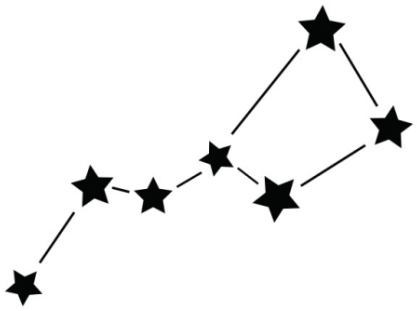
宇宙ステーション・昭和編

SKY BLUE



目次

(一) 八月
(一) 八月 3

(二) 冬
(二) 冬 9

(三) 冬２
(三) 冬２ 17

(四) 桜
(四) 桜 23

(五) 桜２
(五) 桜２ 31

(六) 皐月
(六) 皐月 37

(七) 皐月２
(七) 皐月２ 45

(八) 梅雨
(八) 梅雨 51

(九) 梅雨２
(九) 梅雨２ 59

(十)

(十・一) 夏
(十・一) 夏 67

(十・二) 河野の話
(十・二) 河野の話 73

(十・三) 三上
(十・三) 三上 81

(十・四) 権藤
(十・四) 権藤 85

(十一) 夏２
(十一) 夏２ 89

(十二)

(十二・一) 再び八月
(十二・一) 再び八月 97

(十二・二) 河野の話
(十二・二) 河野の話 101

(十二・三) 権藤
(十二・三) 権藤 111

(十二・四) 三上
(十二・四) 三上 117

(十二・五) 睡眠薬
(十二・五) 睡眠薬 123

(十三)

(十三・一) 夏の終わり
(十三・一) 夏の終わり 131

(十三・二) 宇宙ステーション
(十三・二) 宇宙ステーション 137

終わりに
終わりに 145

(一) 八月

(一) 八月

「にいさん、こっちおいで」

雪さんと初めて会ったのは、去年の夏、八月上旬のことだった。雪さんはそう言って、わたしを手招きした。

雪さんの雪という名は、本名ではない。源氏名であり、個室付き特殊浴場、店の名を、パンドラ、と言った、で働く娼婦だったのである。わたしは当時、まだ十才の少年だった。

雪さんとわたしが出会ったのは、暗黒の宇宙の中にあって燦然と光り輝く銀河系の如く、大都会東京、下町の夜の闇の中に一転眩しくかつ妖しき光を放つ、ネオンの街、吉原であった。時代は、個室付き特殊浴場がまだソープランドと名乗る以前の頃である。

「にいさん、そんなにおっかない顔しないで。こっち、いらっしゃいな。お菓子、あげるから」

にこっと笑って雪さんは、突っ立って遠くからただじっと見詰める、初対面のわたしへの手招きを止めなかった。近くの電信柱に留まった一匹のあぶら蝉が、さっきから引っ切り無しに鳴いていた。

雪さんとわたしがいるのは、パンドラの裏口の前にある、吉原の裏通りのひとつだった。その路上で雪さんは、黄色いＰ箱を逆さまにして腰掛けていた。如何にも雪さんの丸いお尻が痛そうで、わたしはそれが気になってならなかった。何しろ雪さんの恰好ときたら、パンドラの制服である、上半身は水色のセーラー服、下半身は薄いピンクのミニスカートだけだったから。

しかし残念ながら、ミニスカートからはみ出した雪さんの柔らかそうな白い足に性的興奮を覚えるには、わたしはまだ子どもだったし、何よりも派手な制服は、雪さんの地味な容貌には悲しい程不釣合いだった。

日が暮れて夜の帳が下りた裏通りの路地は、ネオン眩しい吉原にあっても薄暗く、電信柱のはだか電球から降り注ぐ仄明かりだけが頼りだった。

その光によって作られた視界に映し出された雪さんの顔は、厚化粧であるにも関わらず痩せて青白かった。左手でわたしにおいでおいでをしながら、自分の足元で餌を貪る柴犬の仔犬の頭を、雪さんはもう片方の手で撫で回していた。その仔犬を雪さんは、タロ吉、と呼んでいた。

こんな夕刻に十才の少年であるわたしが、雪さんのような女の人のそばにいるに関しては、それなりの訳があった。わたしの家は東京都台東区千束二丁目、詰まり吉原のそばにあるごく普通の喫茶店で、父と母がこじんまりとふたりで営んでいた。ところがいつしか吉原の客と雪さんのような吉原で働く人を宛てにして、気付いたら深夜のみ営業する深夜喫茶に変貌を遂げていた。そういう訳だから、両親の監視の目を容易く逃れ、夜間わたしは自由の身だったのである。

　またそういう訳だから、吉原という街はわたしにとって、幼い頃からホームグラウンドのような存在だった。ひとりぼっちで吉原の街を歩いていると、よく家出少年と間違えられ、幾度となく警視庁の警官たちに補導されたものである。

　小学校が既に夏休みに入ったわたしはろくに宿題もせず、その夜も例によって吉原の表通り、裏通りを自由気ままに徘徊していた。
　吉原の裏通りには、野良犬から野良猫、溝ねずみなどが勝手に住みついていたが、大型の犬はなぜかすぐに姿が見えなくなった。もしかしたら客に危害が及ばぬようにと、誰かが見回り、駆逐していたのかも知れない。当時のわたしにはまだ、想像も及ばぬことだったけれど。
　タロ吉も吉原の野良犬だったが、今のところまだ駆逐されずに無事吉原に身を置いていて、散歩するわたしの足にじゃれ付いて来る野良犬の一匹だった。けれどわたしとじゃれ合った後、タロ吉は決まってわたしを置き去りに、さっさと一匹ぼっちで何処かへ出掛けていくのを常としていた。
　そこでこの夜わたしはタロ吉の行方を確かめようと、汗びっしょりになりながら初めてタロ吉の後を追い掛けて来たという訳である。果たしてタロ吉はパンドラの裏口の前に来ると足を止め、突然ウオーンと切なげに吠えたのだった。
　すると間もなくして裏口から、餌を盛った皿を持って、パンドラの制服をまとった雪さんが現れた。餌は野良犬には贅沢品で、ソーセージやハムが豪勢に並んでいる。タロ吉としたら堪らなかったろう。雪さんを見るなり駆け寄り、タロ吉はごしごしとその頭を雪さんの足に擦り付けた。
「よしよしタロ吉、良く来たね。お腹、空いたでしょ」
　雪さんは皿を地面に置くと、Ｐ箱に足を組み腰を下ろした。
「まだ仕事前で、良かった。仕事中だと、出て来れないからね」
　雪さんの仕事というのが一体どんなものなのか、まだわたしには理解出来なかった。
　雪さんの額には薄っすらと汗が滲んでいて、右手でタロ吉の頭を撫でながら、雪さんは左手に朝顔の絵の付いた団扇を持ち、忙しそうにそれを扇いだ。それでもがつがつと餌に食い付くタロ吉の様子を眺めながら、青白く痩せた雪さんの顔はにこにこ笑っていた。
　逞しいタロ吉の食欲が可笑しくて、思わずわたしもくすくすっと笑みを零した。その時初めてわたしがそこにいることに気付いた雪さんは、驚いて顔を上げ、じっとわたしを見詰めた。団扇を揺らす手が止まり、雪さんの笑顔がなぜか壊れた。
　わたしの方も緊張し、顔を強張らせた。けれど逃げ出そうとは思わなかった。なぜなら雪さんはやさしそうな人に見えたし、その黒い瞳は幼女の如く汚れなく澄んでいたけれどその分悲しげで、何かに怯えているようでもあったから。わたしはそんな雪さんの目に吸い込まれるようで、じっと動けずにいた。
　しばらく沈黙が続いた後、雪さんの方から口を開いた。
「にいさん、こっちおいで」
　にいさん、て、わたしのことだろうか。こんな子どもなのに。わたしは訝った。

団扇を地面に置くと雪さんは笑顔を作り、空いた手でわたしを手招きした。しかしわたしは固まったように直立不動のまま、ただじっと雪さんの顔を見返すので精一杯だった。わたしの額から頬へと、大粒の汗が幾つも滴り落ちた。
「にいさん、そんなにおっかない顔しないで。こっち、いらっしゃいな。お菓子、あげるから」
おっかない。そんな顔、ぼく、してないよ……。
わたしは不服を抱きながらも、恐る恐る雪さんの方へと近付いていった。わたしの顔は強張ったままで、確かに怒ったように唇をぎゅっと真一文字に結んでいた。
「そうそ。こっち、いらっしゃいな。遠慮しなくて、いいから」
雪さんは接近するわたしを、厚化粧だけれどマシュマロのようなやわらかな表情で迎えた。わたしの背丈は、Ｐ箱に腰掛けた雪さんとちょうど同じで、ふたりの目線は同じ高さにあった。
「ちょっと待ってて、にいさん。お菓子、取って来るから。タロ吉のこと、見てて」
うん。
無言ながらわたしが小さく頷いたので、安心したように雪さんはパンドラの中に姿を消した。
「タロ吉なんて変な名前で、おまえ、嬉しいのかい」
雪さんが戻って来るまでの間、わたしはしゃがみ込んでタロ吉に問い掛けながら、相変わらず無我夢中で食事を続けるタロ吉の頭を撫でた。
雪さんは、直ぐに戻って来た。本当に両手一杯にお菓子を携えて。不二家のパラソルチョコ、明治のアポロ、同じく明治の苺の板チョコ、グリコのキャラメル、それに東ハトのオールレーズン。
うわあ、食べたい。
思わずわたしの頬は弛んだ。
「やっぱり、子どもね。これ全部あげるから、にんさん、おねえさんと仲良しになってね」
「うん」
深く考えもせず頷くと、わたしは雪さんが差し出すお菓子を無遠慮に全部受け取った。
「ありがとう」
「どういたしまして。溶けちゃうから、早く食べて」
促されわたしは、早速パラソルチョコをもぐもぐと頬張った。Ｐ箱に座り直した雪さんは、そんなわたしをじっと眺めた。さっきタロ吉を見ていたように。わたしは気恥ずかしくなって、頬を紅潮させた。
「ごめんね、にいさん。さっき、気安く呼んだりして。だってね……」
ため息混じりで、雪さんは続けた。
「だって、にいさん。似てたから」
今度はアポロを一粒ずつ口にしながら、わたしは聞くともなしに雪さんに耳を傾けていた。
「弟に、とっても似てたから、つい」
「弟に」
そこで初めて驚いたわたしは、食べるのを止め雪さんを見詰め返した。

「うん。太郎吉って、名前だったの」
　たろきち……。
　それでこいつの名前、タロ吉なのか。妙に納得しながら、わたしはタロ吉に視線を移した。
「名前だったのって……。まだ生きてるんだけど、わたしの太郎吉ちゃん。でもわたしがこんなとこ来ちゃったから、もう会えないから。ねえ、タロ吉」
　雪さんはその青白い細い指で、再びタロ吉の頭を撫で回した。それはとても悲しい目をしながら。わたしは思わず、どきっとした。雪さんの笑顔が、翳りを帯びた大人の女の表情だったから。
　こんなとこ来ちゃった、って……。
　なぜ雪さんがこんな吉原になど来たのか、そしてなぜ弟さんともう会えないのか。その時のわたしに、分かる筈もなかった。
「にいさん。暑いわね、毎日」
　雪さんはまたため息を零しながら、弱々しい手付きでゆっくりと団扇を扇いだ。
　そうしているうちに、遂にタロ吉が餌を平らげた。雪さんはＰ箱から立ち上がると、タロ吉の前にしゃがみ込んだ。雪さんの白い下着がミニスカートから見え、わたしは心臓の鼓動をときめかせながらも、目のやり場に困惑した。すると雪さんは、嬉しそうに冷やかした。
「いやだ、にいさん。見ないで」
　ぽっと頬を赤らめ、わたしは俯いた。
「タロ吉。良く食べたね、お利口さん。じゃ、また明日」
　雪さんにしばしじゃれ付いた後、タロ吉は元気に駆け出すと、さっさと雪さんとわたしの前から姿を消した。
　あーあ、行っちゃった。
　ため息を吐いたわたしに、立ち上がりながら雪さんは寂しそうに告げた。
「にいさん。わたしももう、行かなきゃ仕事」
　仕事……。夢から現実に引き戻されるに充分なひと言だった。寂しさが急に、わたしの胸に込み上げて来た。
「また来てね、にいさん」
「うん」
　わたしは泣きそうな顔で答えた。そして手を振って、パンドラの中に消えてゆく雪さんの細い背中を見送った。
　これが雪さんとわたしの、出会いの宵だった。近くの電信柱に留まったあぶら蝉が、相変わらず鳴いている熱帯夜だった。

(二) 冬

(二) 冬

それは、今年吉原に初雪が舞い落ちた宵のことである。

その夜、パンドラの雪が相手をした客の一人に、渡辺という中年男がいた。渡辺は雪の待つ個室に入るや、品定めするように雪の体と顔をじろじろと目で舐め回した。それから如何にも診察鞄ふうの黒い鞄から、白衣と聴診器を取り出した。

「わたしはね、きみ。何を隠そう、東大医学部の教授なんだよ。今夜はきみを思う存分、診察して上げるから」

ごくっ……。

雪は生唾を飲み込み、身構えた。こういった客は大概、マニアックな変態プレイへと突入するからである。

東大の教授なんて、嘘に決まってる。ほんと、助平そうなおっさん……。

雪は作り笑いを浮かべながら、告げた。

「兎に角、お客さん。先に体、洗いましょう」

バスルームに入り、すっぽんぽんの渡辺の体を、自身の体を使って洗ってやる。先ずはこのままリップサービスで抜かせようとしたが、渡辺はじれったそうに拒んだ。

「いいから、いいから。さっさと、診察に移ろうじゃないか」

「はいはい、分かりました」

仕方なく頷くとバスルームを出て、雪は不安そうにベッドに腰を下ろした。すると渡辺は裸体の上からさっきの白衣をまとい、聴診器のイヤピースを耳に入れると、すぐさまチェストピースを雪の胸に押し当てて来た。

「いやん、冷たーい」

思わず雪はのけぞり、身悶えた。

「こらこら、我慢しなさい。これは神聖なる診察なのだから」

そう言う渡辺には、プライドすら感じられる。あら、本当にお医者さんなのかしら。

「はーい」

雪は陽気に答えた。

「患者のきみは、わたしの言う通りにしなきゃ駄目だよ」

「分かりました、せんせ」

渡辺の真剣な眼差しに、雪は笑いを噛み殺すばかり。

「いやん、くすぐったい。そこはだめ、先生」

胸、へそ、うなじ、背中、腰、太もも……。渡辺が雪の体の各部に、チェストピースを押し当てる度に、雪は身悶え、甘い声と息を漏らした。勿論演技であり、そうやって渡辺の興奮を誘っているのである。

「んん、もう我慢できん。いや、まだまだ。神聖なる診察を汚しちゃいかん、いかん」
　などと戯言を垂れながらも、既に渡辺の目は血走り、呼吸はハーハー荒く、股間は硬くテントを張っていた。
　卑猥な診察は進み、患者の足の裏まで診た後、渡辺はくんくんと雪の足の裏のにおいを嗅ぎ悦に浸った。
「よーし、ＯＫ。一通り診たが、特に悪いところはなさそうだ」
「ほんと、先生」
「ああ、きみは健康そのもの。まったく素晴らしい健康体だねえ。若いし、ナイスバディだし、ピチピチ活きもいい。それでいて時折見せる、あの翳りのある大人の女の表情がまた堪んない。わしゃもう限界、我慢できーーん」
「いいわよ、先生。遠慮せず、さ、横になって」
　しかし渡辺はかぶりを振った。
「いやいや、まだ一番肝心なところが残っているんだよ」
「一番肝心なところ」
「さあ、もっとしっかり、足を広げて」
「いやん。ここも診ちゃうの」
　嫌がる雪を押し倒し、渡辺が最後にチェストピースを押し当てたのは、雪の股間であった。
「おお、パイパンじゃないか、きみは」
「いやん、恥ずかしい」
　雪は童顔である為、パンドラのオーナー西川節子、通称お節が、この子はロリータ路線でいったろかと、雪の陰毛を剃り落としてしまったのである。故にその手の趣味の常連客が、いつも雪を指名していた。
　どきどき、どきどきっ……。
　雪の股間の鼓動が、聴診器を通して渡辺の耳と下半身を直撃。
　どきどき、どきどきっ……。
　渡辺の興奮も遂に頂点に到達した。と思いきや、雪の股間をじっと見詰める渡辺の顔が、突如強張った。
「ん。きみ、このあざ……」
　渡辺の性欲と股間の膨張はすっかり萎え、渡辺は雪の股間の或る一点を指差した。
「どうしたの、先生。なに、あざって」
「ほら、ここ。しかもふたつもあるじゃないか、きみ」
　渡辺が指差しているのは雪の膣の右横であり、そこにはちょうど桜の花びら大の、しかも桜の花びらの形状をしたピンク色のあざがふたつ並んでいた。
「あ、それ。それはね、ふたつとも生まれつきあったの、先生」
「生まれつき」
　ごくん。
　渡辺は生唾を飲み込んだ。
「先生、そのあざがどうかしたの。いやだ、そんな深刻そうな顔しちゃって」
　しかし渡辺は真剣な表情を崩さなかった。

「きみ、これはやばいかも知れないよ」
「えっ、やばい」
　東大医学部の教授だなんて、鼻から信じちゃいないけれど、他人から改めて指摘されると、雪も急に不安になって来た。
「何がやばいんですか、先生。大丈夫でしょ、こんなの。だって子どもの時からずっとありましたけど、わたし今まで何ともなかったですよ」
　しかし渡辺大先生は、首を縦には振らなかった。
「これはね、いや、間違いない。これは正しく、新種の梅毒だよ」
「梅毒。いやーーん、そんなの」
　梅毒と言われちゃ、娼婦としては死刑宣告されたようなもの。雪は動揺し取り乱した。
「嘘、嘘。だって先生、わたしちゃんと二週間に一回、必ず検査受けてますよ。前回だって、何にも問題なしでしたし」
「普通の梅毒だったら、そりゃ検査では問題なしだろうね。でもわたしはさっき、新種の梅毒だと言ったよね」
「新種の梅毒」
「そうだよ」
　然もありなんと渡辺は頷いた。
「きみの梅毒はね、実に厄介な代物で、今まで未発見だったのだよ。だから新種な訳」
「ええっ。ほんとですか、それ」
　ただでさえ青白い雪の顔はまっ青。
「ああ、本当さ。だって発見したのは、何を隠そう、このわたしなのだから」
　渡辺は得意そうに、胸を張って答えた。
「ええっ、先生が。なんか、嘘っぽい」
　半信半疑の雪に、渡辺は声を荒らげた。
「なに、嘘だと。冗談じゃないよ、きみ。こっちは折角親切で教えて上げてんのに」
「あらま」
「信じないなら信じないで、わたしは一向に構わんのだよ。苦しむのは、きみ自身なんだからね」
「やだ、先生。そんなに怒んないで。信じてます、信じてますって。だからもっと詳しく教えて」
「よし、そんなに言うなら、教えて上げよう。この病気はね、今までの検査じゃまだ反応しないんだよ。だから幾ら検査したって無駄」
「そんなあ」
「だけどこの病気特有の症状を、わたしは遂に発見したのだ。まだ学会にもマスコミにも、発表してはおらんがね」
「うわーっ、凄い。先生」
　そして大人しく雪は、渡辺の話に耳を傾けた。
「検査でも見付からないってことはね、治療法もまだないってことなんだよ。詰まり現在のところ、治る可能性はゼロ。もし感染したら、諦めるしかない」
「そんな」

「ちなみにわたしはこの病気のことを、あざの特徴から梅毒ではなく、桜の毒、詰まり桜毒 (おうどく) と名付けた」
「桜毒」
「そうだ。でも喜びたまえ。わたしの研究によれば、桜毒はあざが三つ以上現れて初めて発症するものなのだ」
「三つ」
「きみはまだ、あざはふたつだ。詰まりセーフ」
「セーフ」
　青ざめた雪の顔に、俄かに希望の光が射して来た。
「きみの場合、桜毒であることに間違いはないが、まだ潜伏期間ってやつだから大丈夫」
「潜伏期間ですか。それじゃあんまり嬉しくないんですけど、先生」
「でも発症するより、まだましだろ」
「そりゃ、そうですけど」
　喜んでいいのか、悲しむべきか、落ち着かない雪。
「しかし油断は禁物。もしあざが三つ、詰まりきみの場合あとひとつ、出てきたら……」
「先生、どうなるんですか。黙り込んでないで教えて」
「では、教えて上げよう。桜毒が遂に発症し、きみは一年以内に発狂して死んでしまうだろう」
「ええっ……」
　発狂して一年以内に死ぬですって。雪は思わず絶句し、顔面蒼白になった。
「先生、そんなのいや。わたしを助けて」
　しかし渡辺は、かぶりを振るばかり。
「流石のわたしもこればっかりは、どうすることも出来んのだよ」
「そんな」
「でも桜毒と言っても、悪いことばかりではない」
「どこが」
「例えば桜毒っていうのはあくまでも先天性の病気だから、人には伝染しないのだよ」
「それの何処がいいんですか、先生」
　呆れつつも、雪は仕方なく渡辺の相手を続けた。
「先生。絶対また来てね、お願い」
　別れ際雪は渡辺に懇願し、その背中を見送った。しかしその後、渡辺が雪の前に現れることは二度となかった。

　人には伝染しない……。渡辺の言葉を信じ、雪はその後も黙々と吉原での仕事を続けた。桜毒という大変な病気でありながら、それを誰かに相談することも出来ないまま。
　雪は桜毒に怯え、三つ目のあざが出来ていないか、日に幾度となくチェックするようになった。すると病気は気から、というやつなのか、二週間もしないうちにとうとう三つ目のあざが、股間の左側に浮かんで来たのである。
　ぎゃーーっ、嘘っ。

雪は絶句した。

どうしよう。これじゃわたし、一年以内に発狂して、死んでしまうんだわ……。

雪は奈落の底に突き落とされてしまった。しかし相談出来る相手などいる筈もない。オーナーのお節になど打ち明けようものなら、厄介払いで放り出されるか、或いは半殺しの目に遭わされるやも知れない。

ああ、どうしよう……。

雪はただひとり悩みを抱えたまま、売春稼業を続けるしかなかった。

(三) 冬 2

(三) 冬２

「にいさん、よく来たね」
　雪さんはわたしを見るなり、例の翳りのある笑顔で笑い掛けた。電信柱のはだか電球の光を通して、闇の中に映し出された雪さんの顔は、やはり痩せて青白かった。初雪を経た肌寒い真冬の中、雪さんの息もわたしのそれも、白く凍り付くようだった。
　雪さんはパンドラの制服の上から紺のコートを羽織り、黄色いＰ箱に足を組んで腰を下ろしていた。小学生のわたしは、冬でも半ズボンで過ごしていた。雪さんの足元では例によってタロ吉が、雪さんの与えた餌を貪り食っていた。
　タロ吉の前にしゃがんでタロ吉の様子を眺めながらも、わたしは雪さんのことばかり気にしていた。笑顔の中に見せるあの悲しげな雪さんの表情が、何とも言えずまだ子どものわたしの心を惹きつけてやまなかったのだ。
「にいさんも、座れば」
　立ち上がると雪さんはパンドラの裏口の横に積んである空のＰ箱のひとつを取って、それを裏返し、自分が座っているＰ箱の隣りに置いた。
「うん」
　言われるままわたしは、Ｐ箱に腰を下ろした。Ｐ箱の突起は、半ズボンからはみ出した足に痛かったけれど、わたしは我慢した。雪さんと並んで座り、ふたりしてタロ吉を眺めているのが嬉しかった。
「にいさんがいつ来てもいいように、ほら、いつもお菓子用意してあるのよ」
「ありがとう」
　雪さんが手渡す紙袋を、丁寧にお辞儀してわたしは受け取った。中にはパラソルチョコ、グリコのキャラメルとオールレーズンが入っていた。
「にいさんのお家、ここから近いの」
「うん」
　パラソルチョコを頬張りながら、わたしは頷いた。わたしの家に関して、雪さんが質問するのはこれが初めてだった。
「わたしの家と言うか田舎はね、とっても遠いの」
　タロ吉の頭を撫でながら、雪さんの顔がまた悲しげに翳った。
「何処」
「えっ」
　雪さんの澄んだ黒い瞳の中に、はだか電球の光が映っていた。
「おねえさんの田舎」
「うんとね……」

　雪さんは表通りから漏れて来るネオンライトの目映さに目を移しながら、答えた。
「雪国」
「雪国」
「そ。冬は毎日、雪ばっかり降ってた」
「雪」
「うん。家が農家でね、とっても貧乏だったの」
　農家で、貧乏……。わたしは頷きながら、雪さんの話に穏やかに耳を傾けていた。次の話が出るまでは。
「それで、この街に売られて来ちゃったの、わたし」
　この街に売られて来た。どういうこと。
　吃驚したわたしは、無言で雪さんを見詰めた。雪さんは恥ずかしそうに笑った。
「でも、もう五年前のことだから」
「五年前」
　雪さんは頷きながら続けた。
「まだ高校生だったの、その時、わたし」
「高校生」
　またも吃驚して、雪さんを見詰めずにはいられなかった。
「でもね。そのお陰で、一家心中せずに済んだのよ」
　一家心中……。わたしの驚きは、大きな衝撃へと変わった。
「太郎吉もまだ小さかったし……。だからわたし、学校辞めてここに来たの。向こうを出発したのは、雪が降る寒い寒い朝だった」
　わたしは何も言い返せなかった。ただ雪さんの顔に宿る翳り、悲しげなその表情の理由がやっと分かった気がした。
「だから雪を見るといつも、田舎のことを思い出すの。今頃みんなどうしてるかなあ、太郎吉は大きくなったかなあって。にいさんみたいに元気でお利口さんなら、いいんだけど」
　わたしは恥ずかしくなって、顔をまっ赤にして俯いた。
「にいさん」
「なーに」
「どうしたの、下向いて」
「ううん、何でもない」
「ほんと。ならいいけど、ね、にいさん。それよっか」
　雪さんは笑みを作りながら続けた。
「もし次の冬までわたしが生きてて、東京に雪が降ったら、一緒ににいさん、雪、見ようね」
　次の冬までわたしが生きてて……。おねえさん、どうしてそんなこと言うんだろう。わたしは悲しくなって、じっと雪さんの顔を見詰めた。
「いい、にいさん」
「いいよ」
　確かめる雪さんに、わたしは頷いた。

「じゃ、指切りしよう、にいさん」
「指切り」
　うん。
　無言で答えながら、雪さんは左手の小指を差し出した。わたしはどきどき、胸が高鳴った。と同時に頬を紅潮させた。躊躇うわたしに、雪さんは。
「おねえさんとじゃ、いや。やっぱり汚いから」
　わたしは大きくかぶりを振った。
　そんなんじゃないよ……。
　わたしは慌てて、雪さんの小指にわたしの小指を絡ませた。
　どきどき、どきどきっ……。
　雪さんの指は冷たかった。そして女の人だからなのか、わたしの指の大きさと余りかわらなかった。
「指切りげんまん、嘘吐いたら、針千本のーます」
　わたしの指をぎゅっと握り締めながら、雪さんは口遊んだ。わたしは興奮と照れ臭さから、声が出なかった。
「これで、よっし」
　そう言うと、雪さんは小指を離した。小指を通して伝わって来た雪さんの鼓動もまた、途絶えた。わたしの小指は恋人を失くした孤独人のように、途方に暮れた。
「じゃね、タロ吉。また来てね」
　いつか食事を終えていたタロ吉は、わたしを置き去りにさっさと何処かへ行ってしまった。雪さんと、ふたりきりになった。
「おねえさん」
　わたしは、どうしても確かめたかった。さっき、雪さんが言ったことを。
「なに、にいさん」
「おねえさん、何か病気なの」
　えっ。
　雪さんは吃驚した顔で、わたしを見返した。
「どうして分かったの、にいさん」
「だってさっき言ったでしょ、おねえさん。もし次の冬までわたしが生きて、って」
「ああ」
　雪さんは納得した顔で、わたしを見詰めた。
「ごめんね。にいさんを心配させちゃって」
　ううん。
　わたしはかぶりを振った。
「でも嬉しい。にいさん、ありがとう。やっぱりにいさんって、やさしい人なのね」
　やさしい人……。
　再びわたしは頬をまっ赤にし、更に強くかぶりを振った。
「わたしのことなんか心配してくれるの、にいさんだけよ。ほんと、ありがとう」
　雪さんはわたしの手をぎゅっと握り締めながら、言った。
　どきどき、どきどきっ……。わたしの鼓動はいたずらに高鳴った。

「ほんとうなら接吻したい位だけど、にいさんには、汚いから、ね」
　雪さんは悲しげな眼差しをわたしに向けながら、頷いた。
　接吻、汚い……。どきどき、どきどきっ……。ときめきの中にいるわたしの手を、そして雪さんはそっと離した。
「実はね、にいさん」
「うん」
「わたし、厄介な病気なのよ」
「やっかいな病気」
「でも心配しないで。にいさんには、うつらないから」
　うつらない、でもやっかいな病気って、何だろう……。わたしはあれこれ、乏しい知識の中から思い浮かべた。
「にいさんになんかうつしたら、罰、当たっちゃう」
　ふふふ……。雪さんの笑みはやっぱり悲しげだった。
「わたしね。その病気のせいで、次の冬まで生きられるかどうか、分かんないんだって。とっても偉い、お医者さんの先生が言ってたわ」
　えっ、次の冬まで生きられるか、分かんない……。突然わたしは、目の前がまっ暗になった。
「そんな、悲しそうな顔しないで。にいさん」
　うん。わたしは泣きそうな顔で頷いた。次の冬まで何ヶ月あるのか、急いでわたしは指を数えた。あと、一年足らず……。
「あっ、時間だわ。ごめんね、にいさん。もう店、戻らなきゃ」
　突然雪さんが慌てて言った。
「それじゃね、にいさん」
「うん」
　さっさとパンドラの中へ消えてゆく、雪さんの後姿を見送った。次の冬まで生きられるかどうかも分からない身でありながら、せっせと吉原で働かねばならない雪さんの境遇が、子どもながらに不憫でならなかった。

(四) 桜

(四) 後

(四) 桜

雪は相変わらず桜毒に怯え、日々発狂と死の恐怖に苛まれながらも、健気に吉原の勤めをこなしていた。

霜雪に替わって桜の花が咲き出す頃、そんな雪の前に自らを天文学者と名乗る、河野という客が現れた。

「いらっしゃいませ」

個室の床に正座し三つ指ついて、雪はいつものように客を迎える。見れば河野は四十代後半辺り。平凡なサラリーマン風のさえないグレーの背広を着ていた。

ミニスカートから覗く雪の下着、はたまた雪の童顔と舌足らずな甘たるい声に、河野はすぐさま欲望を掻き立てられた。

「うわあ、タイプだわ、きみ。すっごくいいよ」

「そんな。お客さん、上手ね」

しかしこの男には性欲を満たすことの他に、吉原を訪れる別の目的があった。

「いやむしろ、そっちの方がメインかな」

「ほんと。で、どんなこと」

「うん。ぼくがわざわざ華のお江戸の遊郭の地、この吉原に足を運ぶ、その訳は」

「その訳は」

真剣な眼差しで答えを待つ雪に、河野も真顔で答えた。

「いつかここに宇宙船、所謂ＵＦＯ、未確認飛行物体が着陸するんじゃないかと、ぼくは常々予想しているんだよ」

宇宙船……。

雪は呆れ顔で、河野を見詰めた。

この人、大丈夫かしら。

けれど吹き出したいのを堪えながら、雪は尋ねた。

「どうして、そんなふうに思うの、先生」

すると待ってましたとばかりに、河野が続けた。

「それはだね。この吉原は、ネオンがチカチカと眩しいじゃないか。ねえ、きみ」

「はい」

「そのまばゆい吉原のネオンの海をだね、例えば地球外から眺めると」

「眺めると」

「あたかも、それは……銀河系太陽系に於ける第三惑星即ち我等が地球の、宇宙ステーションの如くに見えるのだよ」

「宇宙ステーションですって。あらまあ、先生、素敵」

流石。もしかしてこのお客さん、本当に天文学者だったりして。
少年のように瞳を輝かせながら熱く語る河野の話に、雪はすっかり魅了された。一方河野の方も、雪に好感を持った。
なんて、純粋な娼婦なのだろう。こんな子がこんな場所で働いているなんて、世の中狂ってる。
「であるからして、そのうちにプレアデス星団の、プレアデスっていうのは高度な文明を持つ星団なんだけど、そこの宇宙船が勘違いして、この吉原に着陸する可能性が大きいのだよ」
「プレア……」
「プレアデス星団。おうし座、別名スバル、知ってるかい」
「うん。おうし座なら、聞いたことある」
「そこに属しているんだよ」
「へえ。そんな遠い星から、宇宙船がこんなとこに」
「ああ、そうだよ」
「ほんと、先生」
「ああ、ほんとさ。だからぼくは恥を忍んで、この街に何度も足を運んでいるのさ」
「まあ、そうだったの。ほんとに素敵なお話ね、先生」
うっとりする雪に、ますます好感度アップの河野先生。
やっぱり純粋な娘だなあ、この子。
「きみは信じてくれるのかね、ぼくの話を」
「勿論よ、先生。わたし、星とか宇宙とか、そんな話だーい好き」
「ぼくもきみのこと、だーい好き」
お互い、熱い眼差しで見詰め合うふたり。
「さあ先生、お体、洗いましょう」
「うん」
こうしてプレイの間中もふたりは意気投合し、宇宙船の話で盛り上がるのだった。
「でもどうして吉原なの、先生」
「と言うと」
「だって、ネオンが眩しい所なんて、世界中いっぱいあるでしょ。わたしはまだ行った事ないけど、東京でも新宿とか渋谷とか六本木とか」
「そうだね。でも、どうしてもこの吉原の、ネオンの海でなきゃ、だめなんだ」
河野をベッドに寝かせながら、問いを続ける雪。
「なぜ」
「それはね、この吉原の街っていうのが、この地球上、いやこの大宇宙の中でも、最も汚れた罪深い街だから、なんだよ」
「罪深い街」
「或いは宇宙で一番哀しい場所」
「宇宙で一番悲しい場所。確かに、そうかもね、先生。なんだかわたし、分かる気がする。だって……わたしも毎日悲しい」
「そうか。かなしいって言っても、哀愁の方の哀しい、なんだけどね」

「哀愁の方の。あら、そうだったの。ごめんなさい」
　話が一段落して、雪は河野にサービスを開始する。
「先生、先ずお口でする」
「うん」
　ベッドで横になった河野の股間に、唇を近付ける雪。
「ほら、こうやってきみとぼく、本来なら肉体関係なんて持つ筈のない男女が、たかが金銭のやり取りだけで、いとも簡単に交わってしまう……。ね、吉原って、本当に罪深い街だろ」
「確かにそうね、先生」
「そんな罪深く哀愁に満ちた吉原のネオンの海だからこそ、プレアデスの宇宙船は丸で吸い寄せられるように、着陸する筈なんだよ」
「でも、先生。どうして罪深い吉原だと、プレアデスの宇宙船が来るの」
「ん、それはね。プレアデス星団のこの宇宙に於ける使命を考えれば、頷けることなんだよ」
「プレアデス星団の使命。なんですか、それ。そんなもん、あんの」
「あるある。その使命に従って、遥か遠いこの吉原にまでやって来るんだよ」
「だーから、その使命ってなーに」
　答えをせっつく雪に、河野は焦らしながら答えた。
「プレアデス星団に住む宇宙人たちの使命、それは……」
「なに、なによ、先生」
「宇宙の浄化」
「宇宙の、じょうか」
「そ」
「何、じょうか、って」
「えっ」
　互いにぽかーんと口を開け、相手の顔を見詰める雪と河野。セブンスターに火を点け、河野は美味そうに煙を吐き出しながら答えた。
「浄化。詰まり、罪穢れを取り除き、綺麗に清めるってことさ」
「へえ。プレアデスの人たちって、偉いのね」
「ま、地球人よりは綺麗好きかもね」
「綺麗好きねえ」
「だからわざわざ自分たちの宇宙船を使って、この宇宙を探検し、罪穢れの多い場所を発見したら、そこをお掃除するって訳」
「へえ、やっぱり偉ーい」
「ま、プレアデスのキャプテンウルトラってとこかな」
「キャプテンウルトラ」
「だからこの吉原なんか、やばいだろ」
「うん、やばーい。でも先生、こんな街、綺麗に出来るのかしら。だってヤクザと売春婦の街よ、ここ」
　雪の言葉に頷きながら、河野は次のセブンスターに火を点けた。

「確かに地球人の発想じゃ無理かもね。でも相手は高度な文明を有するプレアデスだから。でなきゃ、地球まで宇宙船なんか飛ばせないって」
「宇宙船ねえ」
「その高度な文明の利器を使って、パパパッとやっちゃうんじゃない」
「パパパッと。ねえ先生、高度な文明って例えば、宇宙船以外にどんなものがあるの」
「例えば、そうだなあ……」
　腕を組み、河野はしばし考え込んだ。
「例えばさ、医学なんか滅茶苦茶進歩してると思うよ」
「医学」
「そ。地球じゃ絶対治せないような、どんな難病でも、簡単に治せんじゃない」
　どんな難病でも、簡単にって。じゃもしかして、わたしの桜毒も……。
「先生。それ、ほんとですか」
　真剣な眼差しでじっと自分を見詰める雪に、河野は頷いた。
「勿論さ」
　その瞬間、いつもは暗く哀しげな雪の瞳の中に、キラキラとスバルが輝き、希望の光が満ち溢れた。耳にはドボルザークの新世界交響楽が聴こえていて、それは決して空耳などではなかった。
　オーナーのお節がクラシック音楽のファンということもあり、ここパンドラでは店内にクラシック音楽を流していた。ベートーベン、ショパン、マーラー、ラフマニノフ、そしてドボルザーク……。
　お節は関西出身で既に還暦を過ぎていたが、まだまだ元気。流石に現役は引退したが、若い頃は自ら泡姫としてせっせと働き金を貯め、遂にパンドラをオープンさせた苦労人。かといって情に厚い訳ではなく、狡賢く金にシビアな守銭奴、意地悪ばあさんというのがお節の評判である。
　雪は、ドボルザークの新世界交響楽が一番好きだった。田舎の小学校で放課後いつも流れていた曲であり、聴いているとついつい郷愁に襲われてしまうから。空を焦がす夕焼け、その色に染まった哀愁を帯びた黄昏の教室……。そして雪はいつも、太郎吉と交わした最後の会話を思い出すのだった。
「明日、ねえちゃん、何処行くんだ」
「東京」
「そんなとこ、ひとりで何しに行くんだ」
「歌手になる為よ。有名になったら、一杯仕送りするからね」
「すごいな。ねえちゃん、歌上手いから」
　無邪気に笑う太郎吉のまっ赤な頬っぺたに、夕焼けの色が滲んでいた。
「雪ちゃん」
　河野の声に我に返る雪。
「先生、わたし行ってみたい、プレアデス星団に。早く宇宙船、来ないかしら」
「そうだね。ぼくも待ち遠しいよ、まったく。あそこはね」
「うん」
「文明だけじゃなくて、住んでる宇宙人たちのモラルも高度なんだよ」

「モラルも高度」
「うん。純粋で汚れがなくて、正義感旺盛で不正を憎み、常にプラス思考」
「あら、凄ーい。ますます行ってみたくなっちゃった、わたし」
「いいんじゃないの、行ってくれば。もしも自分たちと同じ位ピュアな地球人がいたら、喜んで招待してくれるかもよ」
「ピュアな地球人かあ……。じゃ、わたしなんか無理じゃない」
　落胆する雪を、河野は励ました。
「そんなことはないよ。たとえ体は汚れていても、心、魂がピュアなら大丈夫」
「心、魂が……。分かったわ、わたしも頑張って、ピュアな地球人になんなきゃ」
　固く心に誓う雪だった。
　こうして雪は相変わらず桜毒の恐怖に怯えながらも、いつかプレアデスの宇宙船が自分を助けに、ドボルザークの新世界交響楽流れるこのパンドラに来てくれる日を、夢見るようになった。
　また雪をすっかり気に入った河野は以後他の店には行かず、月に一回常連客として必ず雪の許に、足を運ぶようになったのである。

(五) 桜 2

(五) 桜２

桜散る夕暮れ時、吉原のネオンは既にチカチカと妖しき光を放っていた。
雪さんは、そんなネオンライトの明滅の遥か上空の彼方に目を向け、ぽつぽつと瞬き始めた星明かりを眺めていた。星空の中に何かを探すように。
それが何かは、直ぐに分かった。
「にいさん、おうし座って知ってる」
「うん」
星占いで名前だけは聞いた覚えがあったので、わたしは頷いた。
「夏は見えないんだって、おうし座」
「へえ」
「おうし座の中にね、にいさん。プレアデス星団っていうのがあるんだって」
「プレアデス星団」
「うん」
餌を貪るタロ吉へと視線を落とし、雪さんはタロ吉の頭を撫でた。
「プレアデス星団が見たいんだけど、わたし。早く見たいなあ」
雪さんは寂しげにため息を零した。
「にいさん。遠慮せず、お菓子食べて、食べて」
わたしは言われるまま雪さんからいつものように貰った紙袋の中から、パラソルチョコを取り出すと、外袋のビニールと紙を剥いで、チョコを頬張った。
「ねえ、にいさん。宇宙船って信じる」
雪さんはまた唐突に、わたしに聞いた。
「宇宙船」
そう言われて咄嗟にわたしは、キャプテンウルトラのシュピーゲル号を思い浮かべた。当時日曜日の午後七時、ＴＢＳで放映していた。
そういえば雪さんって、キャプテンウルトラのアカネ隊員に何処か似てる、アカネ隊員の制服を雪さんに重ね合わせながら、わたしはそう思った。雪さんがアカネ隊員ならいいのになあ、憧れのアカネ隊員……。
「なんでもね、この街のネオンライトを宇宙ステーションと間違えて、プレアデスの宇宙船がここに着陸するかも知れないんだって」
「宇宙船が。凄い」
宇宙ステーションと聞いて、わたしは矢張りキャプテンウルトラの宇宙ステーションであるシルバースターを思い描いた。
「おねえさんは宇宙船、信じてるの」

　問い返したわたしに、雪さんはそれは嬉しそうに答えた。
「うん。わたし、信じてるわ、にいさん。冬が来る前にね、プレアデスの宇宙船がここにやって来るの。そして……」
　雪さんは東京の星空を見上げながら、続けた。
「わたしをプレアデスの自分たちの星に、連れて行ってくれるのよ」
　雪さんの瞳は、珍しくキラキラと明るく希望の光に満ち溢れていた。
「ぼくも行きたい」
　雪さんは驚いて、じっとわたしを見詰めた。
「ほんと、にいさん」
　うん。
　わたしは黙って頷いた。
「いいわよ、にいさん。そうだ、タロ吉も一緒に、みんなで行こうか」
「うん」
　わたしは嬉しくなって、タロ吉の頭を撫で回した。
「でもね、にいさん。その為にはピュアな地球人でなきゃ駄目なのよ」
「ピュアな地球人」
「そう。心が綺麗な人間ってこと」
「うん。ぼくがんばってみる」
　さっきより夜の暗さが増して、瞬く星の数も増えた空を再び見上げた雪さんに釣られて、わたしも顔を空に向けた。今は見えないプレアデス星団の星々を捜すように。
　そしてわたしは夢想した。アカネ隊員の雪さんとキャプテンウルトラのわたしがシュピーゲル号に乗って、プレアデス星団へと出発する姿を……。わたしは俄かに興奮を覚えた。
「おねえさん」
「なーに、にいさん」
「宇宙船、早く来ないかなあ」
「そうね。待ち遠しいわね」
「でも、おねえさん、恐くないの」
　雪さんはかぶりを振った。
「にいさんとタロ吉が一緒だったら、なんにも恐くなんかないわよ」
「ほんと」
「うん、ほんと」
　雪さんは頷いた。
「じゃぼくが宇宙の怪獣なんかやっつけて、おねえさんを守って上げる」
「うわあ、頼もしい。やっぱり男ね、にいさん」
　男……。雪さんはわたしの手をぎゅっと握り締めた。男と言われ、わたしは興奮を覚えずにはいられなかった。けれど雪さんは、直ぐにわたしから手を離した。
「でもプレアデスは、地球より文明が進んでいるんだってよ。だから怪獣なんか、いないかも」
「そうなんだ」

「それに、どんな病気だって治せるかも知れないって」
　ああ、そうか。それが雪さんの一番の望みなのだ。わたしは密かに思った。
「ねえ、にいさん。宇宙船が早く来てくれるように、夜空に向かって一緒にお祈りしない」
「お祈り」
「うん。こう言うの」
　雪さんは静かにお祈りを唱え出した。
「家の灯り、町の灯り、駅の灯り、高層ビルの灯り、空港の灯り、都会の灯り、ふるさとの灯り、遠い宇宙の彼方の灯り。ここは吉原、ネオン瞬く宇宙ステーション。どうぞ、プレアデスの宇宙船、お腹空かしたタロ吉と、桜毒の雪を助けに来ておくれ」
　おうどく……。それが、雪さんの病名なのだろうか。一体どんな病気なのだろう。わたしは考えずにはいられなかった。
「じゃ、またね。にいさん、タロ吉」
　雪さんはそう言うと、パンドラの店へと帰って行った。次に会う時、宇宙船のお祈りを記したメモをくれるという、約束を残して。

(六) 皐月

(六) 皐月

桜の花はとうに散り、代わりに木々の若葉が萌え、街路には色とりどりのサツキが咲き誇る季節。

常連客となった自称天文学者の河野が、再び雪の許へやって来た。河野は今夜もまた、宇宙船について熱く語った。

「先生、プレアデスの宇宙船はまだ」

「うん。ちょっとまだ季節的に早いかなあ」

「じゃ、いつ頃だったら、来てくれそう」

「ん、まあ、夏かなあ」

「夏」

「八月の終わり頃」

八月の終わりかあ。それじゃ、あと四ヶ月。長いなあ……。宇宙船の着陸が、どうにも待ち遠しくてならない雪。

「でも先生。もし宇宙船がわたしを連れていってくれるとして、プレアデス星団の中の一体どの星に行くの」

「それはね、アルキオネって星さ」

「アルキオネ」

「その星こそがスバルの中で最も美しく、かつ最も高度な文明を有する星なんだよ」

「あーら、素敵」

そして河野はアルキオネについて、雪に熱く語った。

河野の次に雪が相手をした客は、地元東京下町に地盤を持つ衆議院議員の大物代議士、竹林健一郎だった。

パンドラの後ろ盾となっているのは、全国に名の知れた広域暴力団、稲藤会の関東支部であるが、竹林は昔から稲藤会と黒いつながりがあった。その関係で接待を受けて吉原でもよく遊んでおり、今回は雪が竹林の相手を仰せつかったという訳である。

「さあ、おまえ。俺を存分に楽しませろよ」

「はい、分かりました、先生」

「先生だと。違うだろ、ご主人様だよ」

「はい、すいません、ご主人様」

「そうだ。おまえはな、今夜一晩、俺の性奴隷なんだから、しっかりとご奉仕しろよ」

「はい、ご主人様」

何をされるのやらと、怯える雪。先ずはバスルームで、銀縁眼鏡以外竹林の身にまとったすべてを脱がした。テカテカと脂ぎった顔面、妊婦のようなお腹、肉食過多による加齢臭……。不快さを堪えつつ竹林の体を洗ってやり、ベッドルームへ移動。

「俺はな、もう普通の刺激じゃ満足しねんだよ」

「はい」

「アブノーマルってやつさ」

そして竹林持参のバッグから出て来たのはＳＭグッズ。鞭、ローソク、縄、マスク、極太のバイブ……。竹林はバイブを握り締めるや、スイッチを入れた。

ギィイーン。バイブのモーター音が個室に響き渡る。

「嫌。ご主人様、怖い」

「何を今更、小娘でもあるまいに」

嫌がる雪などお構いなし。竹林は雪の股間目掛け、ギィイーン、ギィイーンを挿入し玩んだ。続いて浣腸、鞭打ちの刑、縄で縛って逆さ吊り、乳房、股間へとローソクの蝋を垂らした。

「あつう、止めて……」

とうとう、雪は失神。

これでゲームオーバーかと思いきや、竹林の欲望はまだ終わらない。意識を失くしベッドに横たわる雪の首へと両手を伸ばし、竹林は絶叫した。

「死ねえ」

息苦しさで意識を取り戻した雪は、自分の首を絞める竹林の鬼の形相に吃驚仰天。

「ぐるじい…、止めでっ」

しかし手の力を緩める筈もないのは竹林。

「お目覚めかね。これは好都合。俺はな、死の恐怖におののく女の顔を見ないと勃起せんのだよ」

狂人、本当に変態だわ、こいつ。わたし、もう駄目かも……。

雪は力なく目を閉じた。

「よし、冥土の土産に、おまえにいいことを教えてやろう」

しかし竹林の戯言など、もう耳には入らない。

「この世界はな、九十九パーセントの経済奴隷と一パーセントのご主人様とで成り立っているのだ。わたしか。わたしもまた悲しいかな、奴隷のひとりに過ぎん」

意識朦朧とする中で、雪は死ぬ覚悟を決めた。

もう、このまま死んでもいい。だって……死んだら、楽になれるから。この地獄のような毎日、吉原から、売春から、みんな、さようなら出来るんだから……。良かった、わたし嬉しい……。

そう思うと、自然雪の顔には笑みが滲み出るのだった。

するとどうだ。それまで勃起していた竹林のそれは見る見る萎えて、紅潮していた顔もすっかり冷めてしまった。

「おまえは頭がいかれてんのか。そんなに殺されるのが嬉しいのか」

目を瞑ったまま雪は頷き、にこっと微笑んでみせた。

「なにーっ。おまえみたいなやつは初めてだ」

竹林はそして力なく、雪の首からその手を離した。
「あーあ、詰まんね」
すっかり白けた竹林は、パンドラからとっとと引き揚げて行った。
これで無事済んだかと思えば、雪にはお節のお仕置きが待っていた。自分の顔に泥を塗った雪が許せない。そこでお節は、三日間雪に食事を与えなかった。

竹林のプレイで受けた鞭の傷がまだ治まらない或る晩、雪は山田という客を相手した。山田は見た目は普通のおっさん、何処にもいる冴えない中年男だった。
「いらっしゃいませ」
雪の待つ個室に入って来た山田は、草臥れたグレーのスーツ姿。雪の三つ指に対して、蚊の鳴くような細い声で答えた。
「はい、いらっしゃいました。わたしみたいな客ですいません」
えっ。
雪は吃驚。そんなことを言われたのは、初めてのこと。見ると如何にも申し訳なさそうに、突っ立っている。
「先ずはお風呂に入りましょうか」
「はい」
素っ裸になった山田の体を洗ってやる。
「お仕事、大変ですか」
「いいえ」
かぶりを振りながら、山田は答えた。
「詰まらない事務の仕事ですから」
そんな。さっきから自分を卑下する山田に、雪は憐憫とまた親近感を覚えた。
「あなたこそ、大変でしょう」
「いいえ」
逆に聞いて来る山田に、雪もかぶりを振った。バスルームでのサービスが終わると、ふたりはベッドへ。
「本当はこういう場所に来るのは、あんまり良くないと分かっているんですけど。ついつい……女の人と縁がなくてね」
「そんなことないでしょ」
気休めでも良いから、雪は励まして上げたいと答えた。
「いえいえ。恥ずかしながら、五十過ぎて未だに独身です」
「独身貴族でいいじゃないですか」
「とんでもない。惨めなもんですよ、今まで一度として女の人とお付き合いした経験なんかありませんから。相手してくれるのは、風俗の女性だけです」
あらら……。
雪はため息。
「でも会社にも、女の人はいるんでしょ」
「いやあ、みんな高嶺の花ですよ。わたしなんて眼中にありませんから、見向きもして

くれません。まったく侘しい人生ですよ、一体何の為に生きているんだか、自分でも分かりません」
　山田は暗い笑みを零した。釣られて雪も苦笑い。
「そんなこと言わないで、お客さん。こっちまで悲しくなっちゃう」
「ごめん、ごめん。あなたはまだ若いんだから、元気出して下さい」
　作り笑いの山田に、雪はたっぷりサービスして上げようと誓う。自分にはこんなこと位しか出来ないから。
「さあ、お客さん。わたしを恋人だと思って、思い切り抱いて」
「ありがとう」
「キスしてもいいのよ」
「でも、唇は駄目なんじゃ」
「いいから、いいから。遠慮しないで」
「うん、分かった。じゃ、お言葉に甘えて……」
　目を瞑り、山田は無我夢中で雪の唇を求めた。その唇は震えていて、更に雪を悲しくさせた。
　それからプレイの間中、雪は大袈裟な演技で感じた振りをして山田を興奮させ、また喜ばせた。
　事が終わり、ふたりは並んでベッドに座った。
「ありがとう、本当にきみはやさしい子だね。女の子にこんなにやさしくしてもらったのは、生まれて初めてだよ」
「ほんと、嬉しい」
　それから山田は躊躇いがちに切り出した。
「雪ちゃん」
「どうしたの、急に改まって」
「うん。もし良かったら……」
「もし良かったら、なーに」
「わたしと結婚して、くれませんか」
「えっ」
　余りに唐突なプロポーズに雪は戸惑った。しかし冗談とも思えない。雪は山田をじっと見詰め返した。
「でもわたし、売春婦なのよ」
「そんなこと、ちっとも構わないよ」
　山田の真剣な眼差しに、雪は黙り込んだ。
「やっぱり駄目だよね、わたしなんか……」
　雪はかぶりを振った。
「そんなんじゃなくて。実は、実はね、山田さん」
「うん」
「わたし、この店に借金があるの」
　こんなことを客に言うのは、初めてのことだった。すると。
「幾らですか」

　山田は真剣に尋ねて来た。
「えっ」
　幾らって……。そんなこと聞いて、どうするの。しかし山田は続けた。
「自慢じゃないけど、貯金だけは一杯あるから」
「えっ、ほんとですか」
「うん」
　山田はやさしく笑みを浮かべた。
　もしかして、この人。借金を立て替えてくれる積もりなのかしら。それって、身請け……。ゴクンっと生唾を飲み込む雪。
　もしそうなら、この店からわたし、自由になれるかも知れない。雪の心は激しく揺れ動いた。
　もしもそうなれるのなら、わたし、この人と結婚してもいい……。
「山田さん」
「なーに」
　やさしく笑みを浮かべる山田に、しかし雪は躊躇。そして……やっぱり駄目よ。雪は大きくかぶりを振った。
　だって桜毒。わたし、直ぐに死んじゃうんだから。こんないい人、とても騙せない。
「ありがとう。でもやっぱり駄目。ごめんね、山田さん」
　雪は泣く泣く山田のプロポーズを断った。
「いいんだよ、気にしないで。駄目元で言ってみただけだから」
　山田は健気に笑ってみせるばかり。
「じゃ、そろそろ帰ります。本当に素敵な一夜でした。ありがとう、雪さん」
「そんな。こっちこそ、ありがとうございました。山田さん、また来てね」
「ええ、勿論ですよ。元気でね、じゃさようなら」
　にこやかに手を振って雪の前から去って行った山田だったが、以後彼がパンドラに来ることはなかった。

(七) 皐月 2

(七) 皐月 2

妖しきネオン瞬く吉原の夜空には珍しく、月が煌々と輝いていた。月の光は清らかで、それは長年月を掛けて吉原に蓄積されたであろう罪穢を払うかのように、花柳の街を照らしていた。

餌を貪るタロ吉をしゃがみ込んで眺めるわたしに、雪さんは一枚のメモ切れを手渡した。

「にいさん、ほら。宇宙船のお祈り」

「あっ、ありがとう」

わたしは立ち上がり、直ぐにそれを暗唱した。

「家の灯り、町の灯り、駅の灯り、高層ビルの灯り……桜毒の雪を助けに来ておくれ」

桜毒。おうどく、とはこんな漢字なのか。

如何にも怖そうな病名に、わたしは身震いを覚えた。白いメモ用紙に書かれた鉛筆の、細く神経質そうな雪さんの文字を眺めながら、どうにかしてこの人を助けてあげたい、とわたしは祈らずにはおれなかった。もしも宇宙船が本当に雪さんを救ってくれるのなら、一日も早くここに来て欲しいと。

わたしの声に合わせて自らが編み出した祈りの言葉を唱える雪さんの横で、けれど小学生のわたしですら、すべて夢物語に過ぎないのだと分かっていた。プレアデスの宇宙船が存在していて、それがここ吉原に着陸し、雪さんを助けてくれるなど……。

「お月さん、綺麗ね」

「うん」

月に向かって真剣に祈る雪さんの姿は、子ども心にも痛々しく不憫でならなかった。

「宇宙船ね」

「うん」

「八月の終わり頃には来るんじゃないかって、先生が」

「八月の終わり、すごーい」

「ね、もう直ぐよ。楽しみね、にいさん」

「うん」

八月の……、晩夏、夏の終わり。指折り数えて、あと四ヶ月弱。

まさか……。ため息混じりで月を見るわたしに、雪さんは続けた。

「アルキオネ」

「なーに、おねえさん」

「わたしたちが行く、プレアデス星団の中の星の名前よ、にいさん」

「アル、キオネ」

「そう」
「その星が、プレアデスの中でも一番高度な文明の星なんだって」
　アルキオネ、アルキオネ、アルキオネ……。
　わたしはその星の名を、呪文のように心の中で幾度も唱え続けた。そこが吉原など存在しない、桃源郷であることを祈るように。売春もなく、貧乏もなく、病気もまた存在しない世界であるならば、と。
　ああ、しかしすべては矢張り夢物語に過ぎない。宇宙船、宇宙ステーション、宇宙旅行など、キャプテンウルトラの特撮の世界でしかないのだ。そしてＴＶ放送が終わったら、キャプテンウルトラも、アカネ隊員も、みんなこの地球に生きる生身の人間に戻り、それぞれの悲しみや苦悩と向き合いながら生きてゆくしかないのだ。この星の上で、精一杯、懸命に生きてゆくより他に術はなし。
　地球とアルキオネ……、あれっ。
　でも、おねえさん。
　口にしようとして、わたしは止めた。雪さんをがっかりさせたくなくて。でも考えたら、やっぱり無理がある。だってわたしたち地球人がこの地球以外の、プレアデス星団のアルキオネなどという星の上で、生きてゆける筈はないのだから。
　大気、水、食物、温度、気候……。それともアルキオネとは、そこまでカバーしてくれる程文明が進んでいるのだろうか。
　そんなことを想いながら、餌を食べ終え満足気に駆け出すタロ吉を、雪さんとふたりで見送った。
　いつか吉原の空を重たい雲が覆い、月が隠れてしまった。しかしこの街が夜の闇に沈むことはない。それこそ宇宙ステーションのような眩しいネオンライトが、妖しく照らし続ける。今宵も女を求めて何処からともなく男たちが集まり、お金と引き換えに、わたしの大事な雪さんも行きずりの男に玩ばれるのだ。
　だから、夢見ずにはいられない。たとえ夢物語だと分かっていても、宇宙船、アルキオネを。雪さんとふたりで、待たずにはいられない。雪さんの救済を、雪さんが普通の女の人として生きられる世界の到来を。
「にいさん、どうしたの」
「えっ」
　雪さんが心配そうに、わたしの横顔を見詰めていた。
「さっきから、深刻そうな顔してるから。にいさん、何か悩みでもあるの」
　ううん。わたしは大きくかぶりを振った。
　違うよ。心配してるのは、ぼくの方なのに……。
　わたしは何だか悔しくて、涙が込み上げて来た。必死にそれを堪えながら、再び雲の切れ間から顔を出した月の光をじっと見詰めた。遠くでタロ吉の鳴き声が、聴こえた気がした。今頃タロ吉は、何処をほっつき歩いているだろう。それとももう、路地裏の巣に戻って眠っているだろうか。
　路地裏の巣……。そうだ。わたしは閃いた。
「ねえ、おねえさん」
「なあに、にいさん」

「おねえさんは、こんなところに、いたくないでしょう」
「えっ。何よ、行き成り、にいさんったら」
「だから……、おねえさん、ぼくと逃げよう」
　わたしは思い切って告げた。
「えっ、にいさんと逃げる」
　驚いた雪さんは、じっとわたしを見詰めた。雪さんの瞳の中に、わたしの顔が小さく映っていた。
「でも逃げるって。にいさん、何処へ」
「ぼくの家」
　けれど雪さんは直ぐにかぶりを振った。
「駄目よ。お父さん、お母さんに直ぐ見付かっちゃうでしょ」
「うん、そうか。じゃ、ホテルは」
　けれど、これも駄目。
「にいさん、お金持ってるの」
　今度はわたしがかぶりを振った。
　じゃ、どうしよう。
　咄嗟にわたしは、あの家を思い出した。それは通学路の途中にある、一軒の空き家だった。そこは長い間住み手がなく、今は雑草が庭に伸び放題。小学校のクラスでも、お化け屋敷と評判の家だった。
「じゃ、学校の近くにある空き家はどうかな」
「空き家。そうねえ」
　けれどもやっぱり雪さんは、悲しげにかぶりを振った。
「ありがとう、にいさん。でもやっぱり無理よ、直ぐに見付かっちゃうから。見付かったらね」
「うん」
「おねえさん、殺されちゃうかも、知れないから」
　ころされる……。
　その一言で吉原から逃げることがどれほど恐ろしいものなのかを実感したわたしは、雪さんとの逃亡生活というわたし自らの甘い夢物語の幕を閉じるしかなかった。わたしの目から、知らずに涙が零れ落ちていた。
「にいさん」
　驚いた雪さんも涙を浮かべた。
「ごめんね、にいさん。怖いこと言ったから、驚いちゃったのね。大丈夫よ、心配しないで。ね、にいさん」
　泣きながら雪さんは、わたしに笑い掛けた。その青白い作り笑顔の中を、雪さんの涙の滴が地面へとすーっと落ちていった。わたしはそれを美しいと思った。雪さんは、わたしの前にしゃがみ込んだ。
「ありがとう、にいさん。にいさんて、ほんとにやさしいね」
　雪さんはそして、わたしの肩に腕を回したかと思うと、ぎゅっとわたしを抱き締めた。
　どきどき、どきどきっ……。止まるかと思うほどに、わたしの鼓動は高鳴った。雪さ

んの大人の女の人の匂いが、やさしくわたしを包み込んでいた。
「ありがとう、本当に。にいさん」
　わたしの肩から腕を離すと、雪さんはじっとわたしの顔を見詰めながら、わたしの頬に掛かる涙をその指で拭ってくれた。
「男の子なんだから、もう泣かない、ね」
「うん」
「さ、一緒にお祈りしよう、宇宙船の」
「うん」
　宇宙船……。今の雪さんとわたしには、これしか救いはないのだ。こんな夢物語の奇蹟に縋るしか他に術はないのだと悟ったわたしは、雪さんと共に一心に祈った。涙に滲んだ月の光は、それはそれはきれいでならなかった。

(八) 梅雨

(八) 梅雨

穏やかなぽかぽか陽気は夢と消え、吉原の街にも灼熱の日々の到来の前に、雨の季節が訪れた。

土砂降りは繊細なネオンライトを乱暴に散らしながら、アスファルトの路地を激しく叩いて落ちていく。雪は折角の楽しみである店の裏口での夕涼みを雨に奪われ、気分は冴えない。店内の窓辺から幾ら空を見上げてみても、灰色の雲ばかりで銀河すら拝めない。

ああ、これでは折角宇宙船が来ても、見逃してしまうのではなかろうか。雪にはそれが何よりの心配であった。

例によって、河野がまた訪れた。

「いやあ、毎日毎日雨ばかりで鬱陶しいねえ、雪ちゃん」

「まったくね、先生」

バスルームで河野の体を洗った後、ベッドルームに移って雪が尋ねる。

「ねえ先生、アルキオネにも雨は降るの」

「どうだろう。行ったことないから、分かんない」

「えっ」

「嘘、嘘。あの星はまあ、楽園みたいなとこだから、雨は降ってもほんの少しかな」

「へえ、いいわね。じゃ、雪は」

「雪。雪、かあ」

考え込む河野。

「降らないと思うよ。だってね、楽園だから、冬がないんだよ」

「ほんと」

「ああ、本当さ」

「そうなんだ」

雪はため息。幾ら高度な文明の星とは言え、子どもの頃から雪を見慣れてきた雪にとっては寂しい限り。でも助けてもらうんだから仕方がない。

「雪ちゃん。アルキオネのことで、頭が一杯みたいだね」

「そりゃ、そうよ」

「よし、じゃ今夜はアルキオネ人の体位について教えて上げよう」

「体位。あっ、そんなの興味ないから、いいよ、いいよ、ねえ先生」

嫌がる雪を、アルキオネ式体位と称して変態的に攻めまくる河野であった。

それからこれと言った珍客もなく、平凡な客が雪の体を抱いては去ってゆく、雨の日々が続いた。

　或る晩、一見暗そうな、若いサラリーマン風の客が雪の部屋に現れた。年の頃は雪と同じ位。髪はロングヘアで、当時人気絶頂の吉田拓郎をちょっと神経質にしたタイプ。
　雪の個室に入るや男は、暑苦しそうなネクタイを緩め、スーツのポケットから百円ライターとハイライトを取り出して一喫。
「あっ、吸ってもよかったですか、俺」
　美味そうに煙を吐き出したその後で、思い出したように緊張した声で、男は雪に尋ねた。
「あら。構いませんよ、お客さん」
　にこっと微笑む雪に、若い男は好感を覚えた。
「大変ですね、サラリーマンの方は。暑くても、背広着なきゃいけないから」
「ええ、もう毎日が奴隷ですよ、俺」
　奴隷……。
　雪は政治家竹林の言った言葉を、ふっと思い出した。この世界は九十九パーセントの経済奴隷と、一パーセントのご主人様とで成り立っている……。
　改めて雪は、客を見詰めた。今目の前で小刻みに手を震わせながら、貪るようにハイライトを吸う男の顔を。青ざめた顔と疲れたような表情に、なんかわたしに似てるうと共感を覚えたかその瞬間、雪の体の中をびびびっと高圧電流が走った。生まれて初めての経験だった。
　びびびっ……って、何、これ。
　と思う間もなく、そして雪はその男に一目惚れ。ストーンと恋に落ちてしまったのである。
　わたし、この人、好き……。
　厚化粧でまっ白の雪の頬が、血に染まるように紅潮した。
「お客さん、長髪、カッコいい。ガロのマークみたい」
「ええっ、まじ。拓郎には時々、似てるって言われんだけど、俺」
　照れ臭そうに髪を描くその仕草がまた、雪には堪らなくカッコ良く映った。
「お客さん、初めて」
　バスルームで男の体を洗いながら、雪が尋ねる。
「やばい。実は、そうなんです、俺。なんでこんなとこ、いるんだろ。裸までなって」
　またあ、白々しんだから。
　苦笑いしながらも、男を憎めない雪。ところが続いた彼の言葉にどっきり。
「死ぬ前に、一度でいいから思い切り女抱いて、それから死のうかなあって」
　死ぬ前に……。
　見れば相手の顔は、何処か思い詰めたふうでもあった。
「なんかあったの、お客さん」
　問い返さずにはいられない雪だった。
「悩み、病気」
　しかし男はかぶりを振って答えた。
「そんなんじゃないんだけど、俺。なんか、ただ、死にたくなっちゃってさ……」
　ええっ、死にたいって。詰まり、自殺、もしかして……。

　ますます放っておけなくなる雪。
「なんで死にたくなっちゃったの。ねえ、向こう行って話そう」
　もうプレイどころの話ではない。雪は男の肩を抱くように、ベッドルームへ連れて行った。ふたりは並んでベッドに腰を下ろした。
「なんで」
　やさしく囁く雪に、男は心を開いた。
「だってさ、俺生きてたって、なんにも詰まんないんだもん。俺、なんで生きてんのかなあって毎日……」
「うん、分かる、分かる。その気持ち」
「えっ」
「だって、わたしだっておんなじよ。いつもいつも、死にたいって思いながら、生きてんだから」
「きみも」
「うん」
　下着姿でじっと自分を見詰める雪が、男には天使のように見えた。
　この子、かわいい……。
　この瞬間、男も恋に落ちた。
「俺、三上、三上博って言うんだ。博は、万博の博」
「うん、三上博さん。わかった」
「きみは」
「えっ、わたし」
　雪はちょっとどっきり。でも咄嗟に本名でなく、店の名前を名乗ってしまった。
「わたしは、雪」
「雪ちゃんか」
　自殺志願もすっかり忘れ、自分をアピールする三上。
「名前が三上だけあってさ、俺」
「うん」
「愛唱歌は、学生街の喫茶店、でも、人間なんて、でもなくてさ。三上寛の、夢は夜ひらく、ばっか歌ってんだよ、俺」
「へえ、どんな歌。歌ってみて」
「知らないの、夢は夜ひらく」
「うん、ごめんね。世間のこと、よく知らないの、わたし。だって、ほとんどこの店に監禁されてるようなもんだから」
「監禁。何、それ。そりゃ、ほんと酷いな」
「でしょ、博さん」
　熱い眼差しで見詰めながら自分の肩に寄り添って来る雪に、三上は胸がキュンとなった。恐る恐る腕を雪の肩に回しながら、三上は歌い出した。夢は夜ひらく……。
　三上の歌を子守唄のように耳にしながら、雪は目を瞑った。夢、夜ひらく夢って……、吉原、ネオン、宇宙ステーション、宇宙船、アルキオネ……。この唄、わたしにぴったり。
「博さん、素敵」

　目を開けて、うっとりと微笑む雪に、三上はもう爆発寸前。
「雪ちゃん。俺、もう我慢出来ない」
「うん。いいわよ、博。早く来て。わたしにも、あなたのカルピスをいっぱい、ちょうだい」
　商売を忘れて抱かれた女と、吉原の女を本気で愛した男。男と女は本能のまんま、避妊もせずに結ばれたのだった。
　だって、どうせわたしは、冬には死んでしまう身。いいのよ、どうなっても……。

　夜の夢の後、ベッドに座り直し、ふたりは肩を寄せ合い語り合った。
「博、なんで、生きてたって詰まんないの。わたしに詳しく話して」
「俺には、夢も希望もないからさ」
「わたしもおんなじよ」
「そうさ、雪ちゃんもおんなじ。みんな、犠牲者なんだ」
「犠牲者」
「ああ。俺、さっき、奴隷って言ったろ」
「うん」
「この世界はさ、みんな嘘っぱちなんだよ。科学も政治も経済も宗教も家族も、みんな嘘っぱちの子供騙しなのさ」
　難しそうな話と思ったが、雪が黙って聞いていた。
「それなのに、その子供騙しに騙されたまんま俺たちはみんな、死ぬまで奴隷のように働かされるんだ。金の為に、経済っていう目に見えない檻の中に閉じ込められてね。逃げ場所なんかありゃしない。逃げたら路頭に迷うだけ」
「うん」
「虚しいもんさ。な、雪ちゃん、夢も希望もないだろ」
「そうだね」
　適当に相槌を打つ雪。
「でも、こんな奴隷の俺でも、こうやって雪ちゃんと愛し合えたから、もう何も思い残すことなく、死ねるよ俺。ありがとう、雪ちゃん」
「博、やっぱり死ぬの」
　ああ。三上は黙って頷いた。そんな三上を見詰めながら、雪もまた自殺願望へと引っ張られた。否、三上との心中へと……。
　わたしだって博と愛し合えたんだから、もう何も思い残すことなく死ねる……。
「ねえ、博。何処で、どうやって死ぬの」
「うん。ここで」
「ここっ」
　三上は冗談のつもりだった。しかし雪は、本気にした。
「いいよ、博」
「えっ」
「で、どうやって死ぬ」

「死ぬって、もしかして、雪ちゃんも一緒に」
　うん。顔を強張らせた三上に、雪は無言で頷いた。
「博、どうするの」
「ああ、こいつを飲むんだよ」
　三上はスーツの内ポケットから、白い錠剤が詰まったビンを取り出した。
「何、それ」
「睡眠薬さ」
「わかった」
　ごくん、と生唾を飲み込みながら、頷いた雪。
「本気、雪ちゃん。ほんとに本気」
「うん。博こそ、大丈夫」
「ああ、俺は、俺は最初っから本気だよ」
　腹の据わった雪に比して、しかし三上は怖気付いたふうにも見える。
「ふたりで一緒に、天国へ行こう。ねえ、博、天国でずっと、幸せに暮らそうよ」
「でも、雪ちゃん」
　躊躇う三上。
　やっぱ、俺、死ねない。だって……。
　三上の中に、さっき雪と交わった、あの怒涛のような快楽のときめきが甦った。死んじまったら、もうあんな気持ちいいこと、出来なくなるじゃねえか。勿体無い。
「雪ちゃん、俺、なんて言うか」
「どうしたの、博」
「ああ。ほら、折角こうして雪ちゃんと出会った訳だし。少しは俺、世の中に希望みたいなもん、持てそうな気もして来たから」
「だから」
「ああ。だから今夜死ぬのは、止めようかなあって。駄目、雪ちゃん」
「えっ」
　拍子抜けしながらも、にっこりと三上に雪は微笑み返した。
「いいよ、博がそれでいいんなら」
「雪ちゃん」
　再び熱く抱擁し、唇を貪り合うふたり。
「雪ちゃん、俺、また来るから。絶対、来るからね」
「うん、わたし待ってる。でも、無理しないでね」
　涙を堪えて手を振る雪に見送られ、三上はパンドラを後にした。
　こうして三上との出会いによって、絶望の中にも一筋の希望の光を見出した雪だった。しかし、そうは問屋が卸さない。
　三上との愛に目覚めた雪は、それから直ぐに三上以外の男と寝ることが嫌になってしまった。詰まり売春が嫌になってしまったのである。かといって逃げる訳にもいかない。仕方なく雪は、泣く泣く売春稼業を続けたのだった。

(九) 梅雨 2

(九) 梅雨 2

「にいさん、恋したことある」

珍しく雪さんが青白く痩せた頬を紅潮させながら、わたしに尋ねた。夕立が過ぎた後の晴れ渡った黄昏の空には、燃えるような夕焼けが広がっていた。

ひとうまたひとつ、ネオンライトが吉原の街に点ってゆく。その派手な瞬きによって表通りは真昼間の如き眩しさで、行き交う男たちの顔を鮮やかに映し出す。

答えに困ったわたしは、誤魔化すように問い返した。

「おねえさんは」

すると雪さんは、照れ臭そうに笑みを零した。

ああ、これは恋したことがあるのだな。

生意気にもわたしは、激しい嫉妬を覚えた。それまであたかも雪さんを独り占めしているかのような錯覚に陥っていたわたしは、裏切られた気持ちでいっぱいになった。

「あるよ、にいさん」

やっぱり。悲しみとも失望とも定かでない感情が、わたしを翳らせてゆく。

「おねえさん、今ね、好きな人がいるの」

雪さんは空を見上げながら続けた。

「好きな人」

雪さんの横顔が眩しくて、落胆をひた隠しながらわたしも空を見上げた。いつしかもう夜の帳が降りて、空には天の川がきらきらと流れていた。失恋……そんな言葉が、心に浮かんだ。確かにわたしは今、失恋したのだと。

ああ、わたしがもっと大人ならば。そうだったなら、雪さんもわたしを、男として見てくれただろうに。

誰を恨むことも出来ない、ただ自分の歳、幼さを恨むしかなかった。

どんな男なんだろう、雪さんの好きな相手とは。恐らくは敵う筈もない年上の男に嫉妬するわたしに、雪さんはその男の正体を教えてくれた。

「店のお客さんなんだけど」

お客さん……。

なぜ。どうしてお客さんなんかを、好きになるんだろう。お客さんなどを、吉原の女は好きになるものなのだろうか。自分をお金で買いに来る男などを。わたしは訝しがりながら、雪さんに問うた。

「でも、おねえさん」

「なーに、にいさん」

夢現を漂うようなトローンとした瞳で、雪さんがわたしに目を向けた。

「宇宙船はどうするの」
「えっ」
「宇宙船がここに来たら、おねえさん、どうするの」
「どうするのって。そうねえ」
　困った顔を浮かべた雪さんに、勝ち誇った気持ちがわたしの心に射して来た。もしかしたら、これで雪さんの気持ちをその男から取り戻せるかも知れない。そんな甘い期待を抱かせながら、けれどそれも束の間、雪さんは直ぐににこっと微笑みながら答えた。
「すっかりわたし、忘れてたわ、宇宙船のこと。どうしよっか、にいさん」
　そんなこと、知らないよ、ぼく。雪さんの余裕の笑みに内心腹を立てながらも、わたしは続けた。
「おねえさんも、タロ吉とぼくと一緒にアルキオネに、行くんでしょ」
「そうだったわね……」
　しばし沈黙した後、雪さんは思い付いたように言った。
「そうだ、にいさん。博、博って言うんだけど、わたしの恋人」
　えっ、ひろし。しかも、わたしの恋人って……。
　じわーっとわたしは、もう泣き出したい気持ちで一杯になった。
「博も一緒に連れてっちゃ駄目。ねえ、にいさん」
　ええっ。答えに困ったわたしは周囲を見回した。吉原の街はもうすっかり夜の中に沈み、目映いネオンの海が街を覆い尽くしていた。それは丸でネオンライトで照らされた巨大なひとつのテント小屋のように見えた。
　本当は嫌に決まっているけれど、わたしは寛容な人間であるかのように振舞った。
「いいよ、おねえさん。一人でも多い方がいいからね」
　するとにこっと雪さんは、それは嬉しそうに笑った。
「ありがとう、にいさん」
　嘘が恥ずかしくてわたしは、タロ吉へと視線を落とした。餌を貪り終えたタロ吉は、いつものように勢い良く駆け出した。これ以上雪さんのお惚気を聴かされては、とても敵わない。
「タロ吉待って。ぼくも行く」
　雪さんから逃げるように、わたしは引きつった顔でタロ吉の後を追った。
「にいさん、タロ吉、またね」
　遠くで手を振る雪さんを、けれどわたしは聴こえない振りで無視した。雪さんを無視するなんて、生まれて初めて……。そのまま何処までも何処までもタロ吉の背中に付いてゆき、わたしは雪さんの前から姿を消した。吉原の表通りに出た。
　夜の吉原に、再び激しい雨が降り出した。眩しいネオンと乾いたアスファルトをしっとりと濡らしながら。それは丸で失恋したわたしの代わりに、吉原という哀しい街がわたしに同情して泣いてくれているように思えた。
　雨粒に驚いたタロ吉は急に足を止め、天を見上げた。わたしも立ち止まった。雨はどんどん強くなり、タロ吉もわたしも直ぐにびしょ濡れになった。不覚にも今夜は傘を持っておらず、わたしはタロ吉と共に近くのビルに駆け込んだ。タロ吉との雨宿りである。

そこは幾つもの風俗店が入る雑居ビルだった。女学生・セーラー服の部屋、未亡人のお宿、ボディガール、綺麗なお姉さんは好きですか……。店の名のネオン看板が、ビルの屋上と壁に所狭しと瞬いていた。

わたしたちが佇むビルの入り口は薄暗く、出入りする客たちがタロ吉とわたしを気にすることもなかった。わたしは降り続く雨をじっと見詰めながら、ぼんやりと雪さんの宇宙船のお祈りを唱えた。

「家の灯り、町の灯り、駅の灯り、高層ビルの灯り……」

タロ吉はそんなわたしをじっと眺めている。改めてタロ吉を見ると、確かに成長しているのか、出会った頃より明らかに大きくなっていた。しかしわたしと違ってタロ吉の場合、暢気に成長を喜んではいられない。

吉原を散歩していたかつての野良犬たちは、いつここから姿を消し、そして何処へ行ってしまったのだろう。わたしはタロ吉をじっと見詰めながら、雪さんのことを忘れるようにタロ吉の将来に思いを巡らせた。

施設に収容されるのか、それとも殺処分されてしまうのか、或いは動物実験のモルモットに……。いずれにしてもこのまま大きくなったら、タロ吉はこの街にはいられなくなる。そんなことも知らずに、毎日暢気に吉原の街を徘徊するタロ吉が不憫に思えて胸が詰まった。雪さんへの傷心も忘れて。

「このままじゃタロ吉、大変なことになっちゃうんだよ」

幾等心配したところでタロ吉に分かる筈もないし、わたしには何も出来ない。やっぱりみんなで一緒に宇宙船に乗って、アルキオネに行く方がいいのだ。

「家の灯り、町の灯り、駅の灯り、高層ビルの灯り……宇宙船がやって来るのを、寒さこらえて待っていよう。辛さも悲しみも、泣きそうな顔こらえて、タロ吉とふたり」

わたしは真剣に祈りの言葉を唱え、そして心から祈った。

みんなでアルキオネに行けますように……。

雨の彼方の吉原のネオンライトを見上げた。あの瞬きを宇宙ステーションと間違えて、プレアデスの宇宙船が着陸するなんて、本当だろうか。おねえさん、変な夢でも見たんじゃなかろうか。

立っているのに疲れたわたしは、欠伸しながらしゃがみ込んで、タロ吉の頭を撫でた。

さっきは、みんなでアルキオネに行けますように、なんて祈ったけれど、やっぱりひろしさんなんて人とは、絶対一緒に行きたくないなあ。

同意を求めるように、わたしはタロ吉に問い掛けた。

「タロ吉も嫌だろ。そんな人と一緒に行くなんて」

けれどタロ吉は返事もせず、ただじっと雨を目詰めているばかり。雨が弱まったのか、そしてタロ吉はわたしを置き去りに、さっさと走り出したのだった。あーあ、何とも愛想のない犬だろう。

「タロ吉……」

ひとりぼっちになったわたしは、再び雪さんのことを思い出し胸が痛んだ。どうして良いか分からず、その後もしばらくじっと雨宿りを続けた。雨に滲む吉原のネオンライトを、泣きそうな目でぼんやりと見詰めていた。

(十)

(十・一) 夏

(十・一) 夏

東京もついに梅雨が去り、吉原の街は本格的な夏の時間を刻み始めた。昼間はギラギラとした太陽の光が容赦なく照り付け、路地のアスファルトも溶け出してしまいそうな程。商売前の表通りにはまだ行き交う人も少なく、電信柱に留まった蝉達の鳴き声ばかりが騒々しい。丸で白昼夢に浮かぶ街である。すべてが夢、街全体が午睡の中にひっそりと息を潜めているかのよう。

ところが日暮れとなるや、その姿は豹変し、夜の仇華としての正体を曝け出す。点り出す七色のネオン、徐々に増えて来る人波の勢い。と共に熱気も増してムンムンムラムラ。そのまま熱帯夜へと突入する。

厚化粧に派手なコスチュームの女たち、或いはチンピラ風情の野郎どもが客を呼び込もうと声を上げる。

「ねえ、そこのいかしたパパさん、寄ってかない。スペシャルサービスでお迎えするから」

「そこのお兄さん、はいはい寄ってらっしゃい、見てらっしゃい。ピチピチ活きのいい、ナイスギャルがわんさかいるよ」

客もヤクザ風の怖いあんちゃんから、草臥れたサラリーマンやら初心な童貞青年など様々。その中に自称天文学者の河野の姿もあった。河野が宇宙船が来ると予言した八月の終わりまで、あと約一ヶ月半。

「先生、いらっしゃい」

いつものように河野を出迎える雪。しかしその顔は冴えず、如何にもやる気なさそうである。

「どうしたの、雪ちゃん。元気ないみたいだね」

「さすが、先生。実はそうなのよ」

「何か、あったのかい」

そこで雪は、河野相手に愚痴を零した。

「うん。わたしね、もうこんな仕事さっさと辞めたいの」

「おっと、急にどうしたのかな。尤もこんなとこで自分から働きたいなんて人、いないだろうけどさ」

バスルームで河野の体を洗ってあげながら、雪は恥ずかしそうに告げた。

「それがね、先生。わたし、彼氏出来ちゃって……」

「ええ、まじで」

驚いてはみせたが、正直宇宙船の着陸にしか興味のない河野には、どうでも良いことだった。

「良かったね、雪ちゃん。でも確かに好きな人が出来ちゃうと、他の男に抱かれるのなんて嫌になるかもね。そりゃ辛いわ」

　河野の言葉に頷きつつ、雪は思わず涙ぽろり。
「さっすが、先生。女心、良く分かってる。そうなのよ、わたし今とっても辛いの」
「じゃ、ぼくの相手をしている今ぐらい、ゆっくりと休みなよ、雪ちゃん」
「えっ。いいんですか、先生」
「ああ、今夜はきみに指一本触れるつもりはないから」
「ほんとに。でもどうして、先生。わたしのこと、もう飽きちゃった」
　すると河野は苦笑いしながら、かぶりを振った。
「そんなことじゃなくてさ。雪ちゃん、ぼくは今夜から禁欲することにしたんだよ」
「禁欲。また、どうして先生」
「だからね、ほら。きみも知ってる通り、そろそろプレアデスの宇宙船がこの吉原にやって来る日も近いじゃないか」
「そうよ、先生」
「だから、その日まで禁欲して、宇宙船が着陸するその瞬間を、神聖な気持ちで迎えようと思うんだ」
「神聖な気持ちで」
「そう、ぼくに出来る禊ってやつかな」
　あらま、ほんと変わった先生。吉原に来ておいて、禁欲も神聖もなかろうにと、雪は吹き出したいのを堪えた。
「先生ってほんと偉いのね、さっすが」

　シャワーで夏の汗を流し体を洗い終わると、いつものようにふたりはベッドルームに移ってベッドに腰を下ろした。いつもと違うのは、ふたりとも既に服を着ていること。
　でも、じゃ時間まで何すんの。
　手持ち無沙汰の雪に、河野はセブンスターを美味そうに吸いながら言った。
「じゃ時間まで、宇宙船の話をして上げよう」
「えっ、ほんと。さっすが、先生」
　ふう、良かった、と雪は胸を撫で下ろした。
「じゃ、早速始めるよ。ではでは、プレアデスの宇宙船は、ここ吉原に来るまで一体どんな経路を辿って来るだろう。言わば宇宙旅行だね。我等が宇宙船がどんな星座を巡って来るのか、順番に説明してゆこう」
「はーい。なんか面白そう、先生」
　パンドラ店内のＢＧＭがドボルザークの新世界交響楽に変わり、雪たちの個室にも流れて来る。
「おお、いいねえ。グッドタイミング」
　すっかり気を良くした河野は目を瞑り、遥かなる銀河に思いを馳せながら、夢見るように語り出した。
「銀河系、太陽系の第三惑星即ち我等が地球の東京ここ吉原も梅雨が明ける頃、キャプテンウルトラとアカネ隊員と万能ロボット、ハックを乗せた宇宙船シュピーゲル号は、アルキオネの第一宇宙ステーション、シルバースターを出発した。直ぐに牡牛座を抜け出

すと、先ずはお隣りのオリオン座に立ち寄った」
「オリオン座。それなら、知ってる」
「一番ポピュラーな星座だし、寒々とした真冬の夜空に輝くあの三ツ星には、旅人でなくとも励まされた人は多いだろう」
「そうそう、三ツ星。うちの田舎の冬は死ぬほど寒かったから、凍えながら見てたわ。でも、どうしてオリオン座に行ったの、わたしたちの宇宙船」
「オリオン座の三ツ星からここ吉原のネオンライトを眺めながら、吉原について話し合う為さ」
「話し合うって……。でも先生、見えるんですか、オリオン座からここのネオンライトなんて」
　素人でも分かる素朴な疑問を呈する雪。
「それが見えるんだよ。なぜならオリオン座の三ツ星は、宇宙の闇を照らすサーチライトなんだから」
「ほんとですか、先生。わたしが宇宙とか星のこと全然知らないからって、適当なこと言ってません」
「言ってない、言ってない。ほんとだってば。だから吉原の街の様子もばっちし見えるんだよ」
「ばっちしって。じゃここパンドラも」
「見える見えるって言うか、見られてます、はい」
「ほんと。じゃ、吉原についてどんなことを話し合うの、先生」
「吉原がどんな街なのか、そしてこの大宇宙の中で吉原が存在するに値する場所なのかどうか、そんなことを話し合うんだよ」
「へえ、なんか難しくて退屈そう」
　思わず欠伸をする雪。そんなこと気にも留めず、河野は続けた。
「詰まりね、吉原イコール売春というものが許されるべきものなのか否か、その結論を出そうという試みでもあるんだな」
　はあ。ますます訳分かんない。
　仕方なく雪は、大人しく河野の話に耳を傾けた。眠たげに目を瞑り、お伽噺でも聴くように。

(十・二) 河野の話

(十・二) 河野の話

　キャプテンウルトラとアカネ隊員とハックは、各々分離したシュピーゲル号の１号、２号、３号に乗って三ツ星のひとつずつに着陸すると、早速吉原のネオンの海に目を向けた。
「キャプテン、あの異様に眩しくチカチカと明滅する銀河系太陽系第三惑星の光は、一体何ですか」
　問うアカネ隊員に、キャプテンウルトラは答えた。
「ああ、あれこそが今回行う宇宙の旅の、最終終着宇宙ステーション、ヨシワラだよ」
「ヨシワラ」
「ヨシワラ、ヨイトコ、イチドハオイデ。サケハウマイシ、ネーチャンハキレイ」
「ハック。それを言うなら」
「知ってます。ザフォーククルセダーズの、帰って来たヨッパライですよね、キャプテン」
「そうとも。流石はアカネ隊員」
「そんなこといいから、ヨシワラのことを教えて下さい、キャプテン」
「ヨシワラとは、一言で言えば、売春の街」
「売春……」
「バイシュン、ヨイトコ、イチドハオイデ。サケハウマイシ、ネーチャンハキレイ」
「こらハック、いい加減にしろって」
「そうよ、ハック。売春なんて少しも良くないわ。でキャプテン、今回、その売春の街をわざわざ最終終着ステーションとしたその意図は」
「その意図は」
　キャプテンウルトラは慎重に言葉を選びながら、答えた。
「罪多きあのヨシワラの街を如何にすべきか。この宇宙の中に引き続き存続さすべきなのか、それとも永久に滅ぼしてしまうか。その最終ジャッジを下す為なのさ。つまりヨシワラの最後の審判という訳だ、アカネ隊員」
　最後の審判と聞いて驚き、アカネ隊員はじっとキャプテンを見詰めた。
「そう、その為に百聞は一見に如かず。わざわざこうして我々が、あの街に赴かんということなんだよ」
「成る程。分かりました、キャプテン。では我々の任務は責任重大。何しろヨシワラの命運が、掛かっているんですからねえ」
　アカネ隊員は武者震い。
「そういうことだ。正に責任は、重大。何しろ売春の善悪、白黒をつけろってんだから、堪らない」

　キャプテンウルトラのこの言葉に、しかしアカネ隊員は不満げ。
「はあ。キャプテン、ちょっと待って下さい。売春は勿論、悪だし、まっ黒の黒ですよね」
「そうとも、アカネ隊員。きみの言う通り、売春は悪だ。ただしそれが必要悪なのか、それとも不必要なのかってとこなんだよ」
「必要悪、ですか。なんか都合のいい言葉ですね、キャプテン」
　皮肉たっぷりのアカネ隊員。
「ま、そう結論を急がなくとも、アカネ隊員。我々の旅は今始まったばかりなのだから。これから星座を巡りつつ、おいおいゆっくりと結論を導き出そうではないか」
「ま、そうですね、キャプテン」
　そして再び、ヨシワラのネオンを眺めるふたりとハック。
「この清らかなる宇宙の星々の下、恐らくはヨシワラの空にも天の川銀河の聖なる星々の瞬きが架かっているでしょうに。なぜにまた第三惑星人たちは、売春などという不純な行為に走るのでしょうか」
「そうだね。第三惑星人たちからしたら、我々には思いも付かない何かそれなりの訳が、あるのかも知れないなあ。よし。では、しばらく休憩したら、次の星座へと向かおう」
　一同、キャプテンの言葉に頷いた。
　オリオン座の後に、にゃおーっとやまねこ座を通過したら、次は北斗七星が輝くおおぐま座に立ち寄った。
「この星座には、とても悲しい伝説があるんだよ、アカネ隊員」
「悲しい伝説。それは、どんな話ですか」
「ああ。カリストという、きみのように美人の女がいてね。彼女がよっぽど美人だったのか、大神ゼウスに気に入られちゃうんだよ」
「別に良いことじゃないですか」
「それがさ、気に入るだけならいいんだけど、ゼウスの野郎、あんまりいい女だったもんで我慢出来なかったんだろうね。とうとうカリストに襲いかかって、無理矢理関係をもっちまったんだよ」
「はあ。何ですか、それ。それって婦女暴行、立派な犯罪ってことですよね。何なんですか、その大神ゼウスって。偉大な神様どころか、ただのスケベ爺じゃありませんか」
「その通り。そんなんが神様やっちゃってるから、世の中おかしくなってしまうのかもね」
「わたし、絶対に許せない」
「ところがまだ伝説には続きがあってね。哀れなカリストは、ゼウスの子を身ごもってしまうんだよ。そしてそれを知ったゼウスの女房ヘーラーが嫉妬して、怒り狂っちゃう訳」
「そりゃ、怒り狂っちゃうでしょ、女なら」
「で嫉妬の塊ヘーラーは、カリストに呪いを掛けたのさ。すると哀れカリストは、まっ黒な毛に全身被われた大熊に、なってしまったとさ」
「ひどーい」
「あれっ」
「どうしたんですか、キャプテン」
「ん。今思ったんだが、もしかしたら婦女暴行とかいった性犯罪防止の為にも、やっぱ

り売春は必要なんではないだろうか」
　しかしアカネ隊員は、透かさずかぶりを振った。
「なーるほど、なるほど、流石はキャプテン。なーんて言いたいところですけど。もしもし、じゃ何ですか。野郎どもが性犯罪に走らないようにって、その為に特定の女子にお金と引き換えに、好きでもない男たちの性欲のはけ口係として生きてゆけってんですか。まさか、冗談じゃあーりませんよ」
「ジョーダン、ヨイトコ、イチドハオイデ」
「だから、ハック。それはもういいってば」
「アカネ隊員、抑えて抑えて。しかし現実として第三惑星にはヨシワラが存在し、そしてそこでは今宵もまた売春が行われている訳で。だったら第三惑星で完璧に売春を禁止したら、一体どうなるんだろう。そこを冷静に考えてゆこうじゃないか、ねえ」
　シュピーゲル号はおおぐま座を後にして、ぐわおーっとしし座、続けてこぐま座を巡り、それから首を長くして、きりん座、更にはペルセウス座、カシオペア座を回って、次にアンドロメダ座に到着した。
　雄大なアンドロメダ銀河を眺めながら、キャプテンたちは再びヨシワラに想いを馳せた。
「第三惑星で売春を含むすべての風俗産業を禁止したら、一体あの星はどうなるだろうね。なあ、ハック」
「モテナイオトコハ、ドウスリャ、イイノ。イッショウ、オンナモダケズニ、シンデクノ。アラマ、ミジメ、カワイソウ」
「ちょっと待ってよ、ハック。確かに一生独身で恋人も出来ない男には、ちょっと辛いかも知れない。でも」
「アカネタイインハ、ビジンノオネエサンダカラ、モテナイオトコノキモチナンカ、ワカリッコナーーイ」
「ちょっと、ハック」
「まあまあ、ふたりとも抑えて抑えて。でもね、アカネ隊員。欲望のはけ口を失った男たちが暴走してさ、性犯罪が大幅に増える可能性はあるんじゃない。もしそうなったとしたら、大問題じゃないか。何しろ我々から見れば、第三惑星なんてまだ未開の暗黒大陸みたいなもんだからねえ」
「ええ、まあ確かにそうですね。それは困った困った」
　結論が得られないまま、シュピーゲル号はアンドロメダ座を発って、とかげ座、ケフェウス座、りゅう座を通過し、次に白鳥座に着いたとさ。
　白鳥座のデネブという星と、わし座のアルタイル、こと座のベガ、この三つの星を結ぶと、ちょうど三角形になり、これをサマートライアングルと呼ぶ。またベガが織姫で、アルタイルが彦星、詰まり七夕の星になる。
　シュピーゲル号の面々は、白鳥座の北十字星からサマートライアングルを眺めつつ、再び売春についての議論を始めた。
「これぞ正に純愛ですね、キャプテン。織姫と彦星の、一年に一度の邂逅ですよ」
「そうだね、アカネ隊員。これこそ売春の対極。なんて美しい、そして切な過ぎ」
「そうでしょう、キャプテン」

　うっとりと夢見る乙女状態のアカネ隊員。
「モテナイ男救済の為の、それでも売春の何が悪いかと言えば、そこに、その男女の交わりの中に愛が存在しないということ。そしてその対価に、金銭のやり取りが伴うということだよね、アカネ隊員」
「あら、分かってらっしゃるじゃないですか。どうしたんですか一体、キャプテン」
「いや、褒めるのはまだ早いよ、アカネ隊員。だからね、通常の恋愛というか夫婦間に於いても、残念ながら愛情がなかったり、金銭的或いは打算的な関係で成り立っている場合も、世の中というか第三惑星にはしばしば見受けられるのではないだろうか」
「はあ、何のことです、キャプテン」
「またあ、しらばっくれちゃってアカネ隊員。例えばさ、打算的結婚ってやつ。結婚相手に実は愛情なんてないくせに、資産目的で接近して結婚する女とか」
「ああ、まあ、確かに。そんなケースもありますかね」
　珍しくアカネ隊員の歯切れが悪い。
「あるある。で、こんなケースと売春と比べて、一体どっちが罪深いんだろうなあ、なんて考える訳。いや別に売春を擁護してる訳じゃないんだけど」
「うーん、そうですねえ……」
　困った顔のアカネ隊員。
「ピンポン、ピンポン。サスガキャプテン、スルドーイ。ソレッテ、フツウノデートデモヨクアルコトデショ」
「ないわよ、ハック」
「アルアル。ダッテイツモオンナハ、オトコニオゴラセルデショ。ソノオカエシトシテ、スキデモナイオトコト、カンタンニカンケイシタリスルデショ。タトエバ、オサケノセイナンカニ、シチャッタリシテ」
「ハック。調子に乗んないでよ」
　顔をまっ赤にしてハックを睨み付けるアカネ隊員。しかし形勢はちょっと不利かも。キャプテンも続いた。
「まだまだあるよ。第三惑星人て、不倫とかセフレとか大好きでしょ。愛と欲望の為なら、信じてくれる人を裏切っても平気って。そこら辺の所謂不純異性交遊ってやつが、第三惑星はひっちゃかめっちゃか。なあ、ハック」
「ソウソウ。アイジン１ゴウ、２ゴウナンテアタリマエ。フタマタ、サンマタ、ヨッテラッシャイ、ミテラッシャイ、トクラア」
「そんなのに比べたら、人に迷惑掛けずにこっそりと吉原で売春なんて、まだかわいい方なんじゃない。ね、アカネ隊員」
「ちょ、ちょ、ちょっと待って下さい、キャプテン。うーん、でも……」
　反論のネタが見付からず、困惑のアカネ隊員。
「つまり、何ですか。第三惑星人たちの性に対するモラルは、男も女も最低最悪ーーってことですか。キャプテン」
「その通り」
「じゃ、そこんとこが解決しない限り、幾等強制的に売春を禁止したところで、絵に描いた餅だってことですね」

「そういうこと。でも今更第三惑星人のモラルの向上なんて、無理だと思うよ。仏教もキリスト教も、その点については無力だったわけだから」
「そうですね。じゃ、キャプテン。いっそのこと……滅ぼしちゃいますか、第三惑星」
「アーア、トウトウイッチャッタ。アカネタイイン、ソレイッチャ、オシマイヨ」
「そうだよ、アカネ隊員。それは、最後の最悪の手段として取っておかねば。滅ぼすなんて、いつでも出来るんだから。さあ、まだヨシワラまでの旅路は長い。もう少し議論しながら、旅を進めよう」
　こうしてシュピーゲル号は白鳥座を後にすると、次の星座へと向かったのだった。

　ふう。
　話が一段落したのか、河野はため息を零し、沈黙した。
「どうしたの、先生。もうお話はお終い」
　驚いて目を開けた雪が尋ねた。
「いや、まだ終わりじゃないけど。今夜はもう時間だから」
「あらま、ほんと」
　時計を確かめると、雪は河野に続いてベッドから腰を上げた。
「じゃ、続きはまだ来月」
「はい。先生、楽しみにしてるから」
「それじゃ、お休み。雪ちゃん」
「お休みなさい、先生。気を付けて、帰ってね」
　雪の個室を出ると、河野はさっさとパンドラを後にした。

(十・三) 三上

(十・三) 三上

河野の来店が終わり、お次の常連客は三上。

翌日三上が来店すると、若きふたりは激しく求め合い愛し合った。

そして何事もなく今月も無事過ぎてゆくかと思いきや、雪の前には悲劇が待ち構えていたのである。それは、妊娠。

通常なら御目出度いことなれど、今の雪にとっては歓迎すべからざる最悪の事態である。しかし調子に乗って三上との間で、避妊なしで関係したのも事実。その報いがストレートに返って来たという訳。

発覚したのは、パンドラが泡姫たちに受けさせている検査の時。二週間に一回の性病検査の他に、お節は念のため月一回妊娠の検査も受けさせていたのである。

妊娠既に一ヶ月。時期的にも相手が三上であることは間違いない。確かに兆候は雪自身も感じていた。頻尿、吐き気、頭痛、眩暈、イライラしたり、気分がすぐれず落ち込んだり。何より生理が遅れていた。しかし認めたくなかった。認めるのが恐かった。でも、もう駄目。これではっきりしてしまった。当然、お節にも伝わる。

やばーい、どうしよう。

顔面蒼白、雪は焦りまくった。妊娠もショックだけれど、それ以上にお節が恐い。案の定、お節は直ぐに雪を事務所に呼び付けた。

「ちょっと、あんた。なに、へましてんの。客に無理矢理やられたんか」

雪は返事に困った。頷いてしまえば、悪質な客のせいにしてしまえる。でもそれじゃ、お腹の子は無条件に、堕胎させられてしまう。

愛する三上の子を宿したのだ。

もし許されるなら、わたし産みたい。

「何、黙ってんの、あんた。正直に言いや、はよ」

ここパンドラにいる限り、どっちにしろ産めるわけがない。堕ろす以外の選択肢はない。でもわたしには、プレアデスの宇宙船がある。もし本当にここに宇宙船が来てくれたら、そしてお腹の子と共にわたしをアルキオネに連れて行ってくれたなら……。折角授かった命、三上との愛の結晶を、アルキオネで産みたいの。

雪は遂に決意した。三上との関係を、一か八か正直に告白してみよう。

「実は……」

「実はて、どうしたん、あんた。そんな深刻そうな顔して」

「実は、ひとりのお客さんを好きになって。そのお客さんとの間にできた子供なんです。でもわたしたち、真剣に愛し合ってるんです」

お節は吃驚仰天。

「なんやて。阿呆か、おまえ」
「お願いです、産ませて下さい」
「駄目や。何、寝言言うてんねん。舐めてんのか、この尼」
　そう吐き捨てると行き成りお節は、雪の頬っぺたを思い切り引っぱたいた。
「痛い」
　尚もお節は雪の体を叩こうとする。痛みと恐ろしさとで床に倒れた雪は、お腹をかばいながらお節から逃げ回った。
「堪忍して下さい、お願いです。お腹に赤ちゃんもいるから」
「どうせ、堕ろすんやから、一緒やないか」
　堕ろす。なんて人でなし。ほんと、鬼婆みたいな人……。
　この時ほどお節の顔が、鬼、悪魔に見えたことはなかった。今更のように雪は、お節を恐れ、そして心底憎んだ。
　翌日雪は、早速産婦人科病院に連れて行かれた。雪が逃亡しないように、パンドラの用心棒であるチンピラ二人が同行し監視した。観念した雪は、泣く泣く手術台に乗った。
　子宮に麻酔を掛けられると、雪は頭がぼんやりして来て、そのまま眠りに落ちた。目が覚めた時には、すべてが終わっていた。雪の身に宿っていたわずか一ヶ月の命は、既に何処かへ消え去っていた。
　雪は声を立てずに泣いた。涙が枯れ果てると、雪はもう泣かなかった。しかし堕胎によってすっかり元気を失った雪に、お節は更なる仕打ちを用意していた。
　本気で男に惚れた娼婦が、他の男と寝なければならない売春稼業になど身が入る訳がない。しかしそれでは商売上がったり。そこでお節は雪が商売に専念出来るよう、雪の前に刺客を差し向けたのである。
　その男の名は権藤晋三と言う、五十過ぎたけちな中年おやじのヤクザである。が、ただのヤクザではない。ドラッグの密売人でもあったのだ。違法な覚醒剤、大麻、コカインは勿論、脱法ドラッグも扱っていた。
　お節としては、権藤に脱法ドラッグを駆使して雪をセックスマシン、正真正銘の性奴隷に仕立て上げてもらおうという魂胆である。
「権藤はん。今回もそこいら辺、ビシッと頼んまっせ」
「任せて下さい。御期待通りのいい女に、仕立て上げてみせますから」
「そら、楽しみや」
　薄ら笑いを浮かべる権藤とお節だった。

(十・四) 権藤

(十・四) 権藤

「いらっしゃいませ」
　まだ中絶による心身の傷癒えぬ雪は、客に成りすました権藤を、そうとも知らず迎えた。
「お姉さん、綺麗だね。名は何てえの」
「雪と申します。降る雪の」
「ああ、雪ちゃんか。なんか元気なさそうだね、大丈夫かい」
「お客さん、ごめんなさい。ちょっと病み上がりなもので……」
「そりゃいけねえな、雪ちゃん」
　病み上がり、と聞いて、ニヤッとする権藤。
「だったら、ちょうどいい。いい薬があるから飲んでみなよ、雪ちゃん」
「薬ですか」
「後であげるから」
　馴れ馴れしい権藤に警戒しながら、雪は仕事をこなす。シャワールームで権藤の体を洗ってやり、それからベッドルームへ。
「これ、これ」
　ベッドに腰を下ろすと、早速権藤は持参した黒鞄の中から取り出した物を、雪に差し出した。ＰＴＰシートに入ったピンク色の二錠の錠剤である。
「ま、風邪薬みたいなもんだよ。さ、飲んでご覧。気分が落ち込んでる時飲むと、スカーッとすっから」
「本当ですか」
　しかし今ひとつ気乗りのしない雪。
「どうしたの、遠慮しなくていいから。飴玉だと思って、ほら、飲んでみなよ」
「でも」
　なかなか受け取ろうとしない雪に、権藤は内心苛々。この尼、さっさと飲みやがれ。しかし愛想笑いでやさしく勧める。
「何心配してんの。大丈夫だよ、俺が保証する。副作用なんか全然ないから」
「そうなんですか。じゃ、少しだけ」
　観念した雪は、仕方なく錠剤を受け取った。
「でも薬代は。高いんでしょ、わたしお金ないんですけど」
「何けちなこと言ってんの。そんなのいいから、いいから。さ、雪ちゃん、飲んで」
「はーい、わかりました。じゃ、これだけ」
　ごくん。

雪は貰った二錠を一気に飲み込んだ。すると、血液に乗って何か得体の知れないものが体中を丸で蛇の如く駆け巡ったかと思うと、それは遂に脳へと到達し、ドパーミンの大量分泌……そして一気に感情へと押し寄せた。否、雪の脳と感情とを支配した。それは激しく、灼熱、目眩のように、陶酔、恍惚、狂気……。

何、これ……。

気付いた時そこには、一匹の野生の女豹がいるのみだった。我を忘れた雪は、全身が性感帯、狂おしい程の性欲に駆り立てられていた。

ああっ、何、これ。欲しい、男が欲しくてたまらない。誰か、誰でもいいの……。

そんな雪の目の前には、権藤という唯一人の男が立っていた。

「どうしたんだ、雪ちゃん」

「お願い……ちょうだい」

「雪ちゃん、本当にどうした。落ち着いて」

などとほざいているが、こうなることは百も承知の権藤さん。

「もう我慢出来ない。ね、抱いて。わたしの体を、壊れるまで抱き締めて」

襲い掛かるように、雪は権藤の体にしがみ付いた。そのままベッドインし、雪は何度も何度も権藤を求めた。その姿は正に性の奴隷であった。

やがて薬の効果が消えると、快感と肉欲は波が引くように薄れていった。雪は何事もなかったかのように落ち着き、ベッドに腰掛けると権藤に尋ねた。

「わたし、どうしちゃったのかしら。お客さん、この薬一体何なの」

「ああ、これはね、ウルトラ・エクスタシーと言う、ま、媚薬みたいなもんだよ」

「媚薬ねえ。でもほんと凄い薬だった。こんなの飲んで、大丈夫なの。覚醒剤みたいに……」

「大丈夫、大丈夫。こいつはシャブなんかと違って、パクられたりしないから」

「ほんと。なら、いいんだけど。もし警察に逮捕されたりしたら、またお節さんに怒られちゃう」

「いや、あの人意外にやさしいんだよ」

「まさか。でもお客さん、お節さんのこと知ってるの」

「ま、ちょっとね」

「お客さんの名前、良かったら教えて」

「俺か、権藤って言うんだ。これからもちょくちょく雪ちゃん指名しに来っから、よろしくな」

「ありがとう、権藤さん」

「また薬持って来てやっから。楽しみに待ってなよ、雪ちゃん」

こうして権藤は、雪にウルトラ・エクスタシーを飲ませることに成功したのだった。

(十一) 夏 2

(十一) 夏２

　夏まっ盛りの吉原。日の長い日暮れ時ですら、既に吉原のネオンは夕闇の中にチカチカと色とりどりの妖しき光を放っていた。
「にいさん、こっちおいで」
　いつものパンドラの裏口で、いつものように雪さんはわたしを呼んだ。けれどわたしは緊張していた。先月の別れ際意識的に雪さんを無視してしまったことが、まだ気持ちの中で尾を引いていたから。雪さんの方はなのにわたしの姿を見るなり、いつも通り愛想良くわたしを呼んだ。怒っている様子など、微塵も感じられなかった。
　宵も近いというのに、あぶら蝉がまだ電信柱やビルの壁に留まって鳴いている。それはもう昼間のような騒々しさで。雪さんは色褪せた朝顔の団扇を扇いでいた。その足元にはタロ吉がいて、忙しそうに餌を頬張っていた。わたしは安心して、雪さんの隣りに駆け寄った。
「暑いわね、にいさん。座れば」
「うん」
　今夜も熱帯夜になりそうな気配。わたしは頬に滴り落ちる汗を拭い、Ｐ箱に腰掛けた。
「ほら、パラソルチョコあげる。早く食べないと、溶けちゃうよ」
　雪さんは悪戯っぽく笑った。
「ありがとう。頂きます」
　実際パラソルチョコは既にもうドロドロに溶け掛けていて、わたしは食べるというより舐める感覚で味わった。その後でわたしは、雪さんの顔をじっと見詰めた。
　夏バテでもしているのか雪さんの視線はトローンとしていて、疲れているように見えた。
「おねえさん、大丈夫」
　問うわたしに、けれど珍しく雪さんは不機嫌そうに答えた。
「大丈夫って。にいさん、どうしてそんなこと言うの。おねえさんなら、大丈夫よ」
　そう言いながら、朝顔の団扇を乱暴に扇ぐ雪さん。
「ふーっ。ほんと暑いわね、にいさん。毎日、毎日、気が変になりそう。早く宇宙船、来てくれないかしら。ね、にいさん」
「うん、そうだね」
　やっぱり雪さん、少し変だ。そう思いながらもわたしは相槌を打った。
「今どこら辺を飛んでいるのかしら、わたしたちの宇宙船」
「どこら辺って」
「だから、宇宙にはね、にいさん。おおぐま座とかアンドロメダ座とか白鳥座とか、いろんな星座の中に、宇宙ステーションがあるんだって」

「うわあ、凄い」
「わたしたちの宇宙船は、そのひとつひとつを巡りながら、最後に吉原にやって来るんだって」
「へえ、じゃまだ、時間かかるんだね」
「そうねえ」
　雪さんは欠伸しながら、ため息を零した。
「おねえさん、宇宙船が早く来てくれるように、お祈りしなきゃ」
　見上げると、まだ暮れなずむ空の中に一番星が顔を出していた。
「にいさん、お祈りひとりで出来る。おねえさんちょっと気分が悪いから」
　ほら、やっぱり。
　わたしは雪さんの具合を心配しながら、宇宙船のお祈りを空に向かって唱えた。
「……祭りの灯り、いろまちの灯り、ネオンの波に濡れながら、とうとうここまで来てしまった。世界で一番眩しくて、宇宙で一番悲しい場所。ここは吉原、誰の夢が叶い、だれの夢がついえたか……」
　段々と空と吉原の街を夜の闇が覆い、ネオンライトの波が妖しく踊り出す。この街はさながら夜の中に回転する巨大なカルーセルのよう。
　本当に、宇宙ステーションみたいだ。
　お祈りを唱えることも忘れ、裏通りから見える吉原のネオンの海に、わたしは見惚れた。
「きれいね、にいさん」
「うん」
　わたしは頷いたが、おねえさんの瞳はまだぼんやり、トローンとしていた。
「みんな、夢みたいにきれい。みんな、夢だったらいいのにね、にいさん」
「えっ」
「みんな夢みたいに、消えてなくなってしまえばいいのに」
　どうしたんだろ。今日のおねえさん、本当に変わってる。丸で酔っ払いみたい。
　心配になったわたしは、じっと雪さんを見詰めた。ところが雪さんはまたふざけたことを口にした。
「あっ、にいさん、知ってる」
「何を」
「だから、わたしたちの宇宙船の乗組員は、キャプテンウルトラなんだってよ」
「ええっ、キャプテンウルトラ」
「そうよ」
　吃驚するわたしに、雪さんは涼しげに頷いた。
「どうしてプレアデスの宇宙船に、地球人のキャプテンウルトラが乗っているの」
　問い詰めるわたしに、雪さんは澄ました顔で答えた。
「難しいことは分かんないけど、天文学者の先生がそう言ってたから」
「天文学者の先生。じゃ本当なんだね、わあ」
　わたしは興奮を覚え、空を見上げながら続けた。
「じゃ、ハックもアカネ隊員もいるの」

　雪さんは面倒臭そうに頷いた。
「じゃ宇宙船は、シュピーゲル号だね」
　また雪さんは面倒臭そうに頷いた。わたしは心の中で思った。
　もしアカネ隊員と雪さんとが対面したら、お互いにどう思うだろう。吉原で働く雪さんのことを、アカネ隊員は……。
「あっ」
　はっとしたわたしは、大きな声を発した。
「どうしたの、にいさん」
　吃驚した雪さんに、今閃いた発想を披露した。
「だからシルバースターって、もしかして吉原のこと」
「えっ」
　興味なさそうな雪さんを忘れ、わたしはひとりで空想し興奮した。
　吉原がシルバースターだったのか。じゃ、司令室は何処にあるんだろう……。
「だから宇宙船はここに来るんだね。この吉原という宇宙ステーション、シルバースターの街に」
　すると雪さんは何気なく零した。
「この店が司令室だったりして。そのシルバースターって宇宙ステーションの。ね、にいさん」
「えっ」
　このパンドラが司令室。俄然わたしは雪さんが働くパンドラに興味を抱いた。
　パンドラの中は、どうなっているんだろう。パンドラの中を探検してみたい。
　わたしは衝動に駆られた。
「おねえさん」
「なーに、にいさん」
「一度でいいからぼく、おねえさんの店の中に入ってみたい」
「ええっ」
　驚いた雪さんはわたしの顔をじっと見詰めながら、かぶりを振った。
「駄目よ、にいさんは」
　丸で叱るような雪さんの口調に、わたしはがっかりした。
「どうして」
「どうしても。だってまだにいさん、子どもでしょ。子どもがこんなとこ入っちゃ駄目、絶対駄目だからね。分かった、にいさん」
　雪さんはじっとわたしを見詰めながら、やっぱり叱るように言った。こんなに厳しい雪さんは初めてだった。仕方なくわたしは諦めた。
「ねえ、にいさん。わたしと博って……」
　落胆しているわたしに、雪さんは突如恋人の話をし出した。見るとタロ吉のやつはさっさと食う物を食って、いつのまにか一匹ぼっちで何処かへ行ってしまったらしい。
「わたしと博、相性がやっぱり良いみたいなの」
　そんな話、聞きたくもない。耳を塞ぐか、今直ぐにでもここから逃げ出したい。そう願いながらも、仕方なくわたしはその場にいた。

「だってね、にいさん。わたしと博が愛し合ったら、直ぐにふたりの子どもが出来ちゃったんだから。凄いでしょ、にいさん」
「えーっ」
　それはもう吃驚して、わたしは引っくり返りそうになった。
　愛し合ったら子どもが出来たって、どういうこと。
「でもね、にいさん。その子、駄目になっちゃった」
「えっ」
　またまたわたしは驚いて、雪さんをじっと見詰めた。
　駄目になったって、一体どうなったんだろう。
　けれど雪さんの口調はあっけらかんとしていたし、顔も相変わらずトローンとしていて、話している深刻な内容とその表情とがどうしても一致しなかった。
「だって、にいさん。わたし病気でしょう」
「うん」
「冬には死んじゃうかも知れないから。おねえさん、お腹の子は諦めたの」
　雪さんはやっぱりにこにこ笑みを浮かべながら、そう言った。
　諦めたの……って。子どもまで出来る程雪さんとそのひろしという男の仲が深いのなら、わたしも雪さんへの片思いをもう諦めるしかない。そう分かっていながら、わたしの心にはひろしへの嫉妬の炎がめらめらと燃え上がるのだった。
　どんな顔をしているのだろう、そのひろしという奴。わたしは雪さんが夢中になるその男の顔を、一度でいいから見てみたいと願った。
　よし。今度機会を見付けて、絶対にパンドラの中に忍び込んでやる。そしてひろしの顔を見てやるぞ。わたしはそう心に誓った。

(十二)

(十二・一) 再び八月

(十二・一) 再び八月

夏まっ盛り。第二次世界大戦の終戦記念日も近付かんとする今日この頃。日本は広島、長崎の二度の原爆に傷つき、無条件降伏せざるを得ない状況へと追い込まれ、遂に終戦を迎えた。そして今の平和な日本があり、娯楽の殿堂吉原があるのであった。折りしも戦後日本の復興の象徴とも言うべきＴＶは白黒からそろそろカラーへと、庶民の間でも移行が始まりつつあった。

そんな蒸し暑く大いに不快なる日々の続く、ここ吉原の売春宿の片隅で、雪という娼婦ほどこの八月という月を待ち侘びていた女はいなかった。なぜなら、いよいよあの自称天文学者の河野が予言した、プレアデスの宇宙船がこの吉原に来るという八月の終わりが近付いたからである。

その河野も待ち切れないのか、まだ八月の初め、そわそわと雪の許へやって来た。

「あら、先生。今月は随分早い来店ね」

「ああ、雪ちゃん。恥ずかしながらどうしても落ち着かなくてね。勿論今月の下旬にも、また来るつもりでいるんだけど」

「あーら、ご苦労様」

「今夜は、その露払いってとこかな」

「露払い」

「ああ。いよいよ神聖なプレアデスの宇宙船が、ここに姿を現すんだからね。少しでもこの場所を清めておかなきゃと」

「吉原を。何言ってらっしゃるの、先生。無理無理、こんな街」

いつものようにバスルームで河野の体を洗ってやり、ふたりはベッドへ。

「ああ、さっぱりした。真夏はやっぱり汗を洗い流すと、気持ち良いねえ」

「先生、今夜もプレイはなしなの」

勿論、と河野は大きく頷いた。

「今夜もぼくは禊だよ。その代わり時間まで、前回の続きを話して上げるから」

「あーら、先生嬉しい。わたし、楽しみに待ってたのよ」

「よし。それじゃ、ええと確か……」

ハイライトを口にしながら、河野は宇宙船の話を再開した。

「シュピーゲル号が、白鳥座を通過したところからだったね」

うん、と黙って頷きながら、雪はそっと目を閉じた。

(十二・二) 河野の話

(十二・二) 河野の話

　キャプテンウルトラたちを乗せ、終着の吉原ステーションを目指して暗黒の宇宙空間をひた走る宇宙船シュピーゲル号は、次におとめ座へと向かった。
　なぜ吉原とか売春などとは遠くイメージのかけ離れた、おとめ座なぞに立ち寄るのか。それはおとめ座にこそ、吉原で働く雪たちのような娘たちにも通じる、或る悲しい伝説があったからである。
「どんな伝説ですか、キャプテン」
　旅の途上で、キャプテンに問うアカネ隊員。
「うん。それは昔々、かの第三惑星にまだ売春のなかった時代のことだよ」
「へ、そんな時代もあったんですか、あの星に」
「まあね。しかしそんな時代であっても、男の女に対する境遇ってのは、まあ今の時代と大差なかったんだね、これが」
「へえ」
「詰まり、女にモテナイ男は全然女との縁がない代わりに、プレイボーイは三人も四人も彼女がいて、モテモテだったんだよ」
「あらまあ。それじゃ、今と全く、おんなじじゃないですか、キャプテン」
「ところが、今とは大違い。何しろ、売春がなかったんですからねえ、お嬢さん」
「そんなに力入れなくても、キャプテン」
「そこでだよ、アカネ隊員。じゃ彼女を作れない男たちは、一体どうやって有り余る性欲を満たしゃいいんだよ、お嬢さん、って話」
「そうですね、割と深刻ですねえ」
「でしょ、でしょ。しかも、その時代、性犯罪は即刻死刑って、超厳しい世の中でもあった訳よ」
「うわあ、そりゃ悲惨」
「であったから、そりゃもう悲惨も悲惨、ああ、レミゼラブル。女のいない野郎たちは、何が楽しくて生まれ来たのって哀れさよ、まじで。一生に一度として、うっふんヘブン、女を抱くことも知らないまま死んでゆく。それまでただ悶々と、無味乾燥なる日々を生きなきゃならない。これって監獄みたいなもんでしょ、はっきし言って。或る意味、拷問」
「確かに、そうですねえ。恋のない人生なんて……」
「ナニ、オセンチニナッテンノ、アカネネエサン」
「ち、ハックは黙ってて」
「オオ、コワ」
「ところがそこへ、そんな嘆きの星、第三惑星に、突如として救世主の如き、ひと柱の女神が現れたんだね、乙女さん」

「女神」
「そう。名をロススプリングっていう、カッコよくてセクシーで、何より豊満なるナイスバディの女の神様だったんですよ」
「その女の神様がどうしたんですか、キャプテン」
「良くぞ、聞いて下された。地上に舞い降りた心やさしき女神ロススプリングは、果たしてどうしたのか。折角生まれ来たというのに、ただ女にモテナイばっかりに虚しく死んでいく男たちの姿に、それはもう胸を痛めた」
「はい、それで」
「それでですよ、アカネちゃん。男たちを哀れに想ったロススプリングは、一大決心」
「一大決心」
「なんと。ど淫乱女に成り切ってモテナイ野郎共を誘惑しては、その豊満ボディで男たちの欲望を、次々と満たして上げていったのです、はい」
「えっ、そんな」
　絶句するアカネ隊員。
「勿論、勿論、お金なんか一切取らない。ただでですよ、ただで。ね、偉いでしょ。まさに女神の鏡さんですねえ、このお方」
「でも……。ねえ、キャプテン、ちょっと待って下さい。それって、分からない気もしないでもないですけど、ちょっと違う気も」
「うん、それもまたご尤も。確かに男たちはそりゃもう狂喜乱舞、ロススプリングを崇め奉った。ロススプリングも、そんな男たちに満足した。勿論、好きでもない男と関係するのは、流石の女神様でも嫌は嫌だったんだけどね。ところが」
「相変わらず、鼻息荒いですねえ、キャプテン」
「ん、ところがだ。このロススプリングの行為に対して、他の神々が激怒したんだよ。ロススプリングよ、一体お前は何をしているんだね。女神ともあろう者が、事も有ろうに地上の男たちと遊び呆けて。神々は話し合い、ロススプリングに罰を与えることにした」
「そんな、罰って」
「梅毒さ」
「梅毒」
　ごくん、と唾を飲み込むアカネ隊員。
「そう。ロススプリングを梅毒に感染させたんだよ。そしたらロススプリングは発狂し、死んでしまったのさ」
「まあ、ひどーい。可哀想」
「だろう。後でロススプリングが淫乱になったその理由を知った神々は後悔し、ロススプリングを天に昇らせ、おとめ座として祀って上げたということだ。チャンチャン」
「なーるほど、成る程。だからおとめ座の中で最も明るい星スピカは、美しくけれど悲しい瞬きを放っているんですね、キャプテン」
「そういうことだね、アカネちゃん」
「アカネちゃん、って。ちょっとキャプテン、馴れ馴れしいですよ。でも……」
「ん、どうかしたかね、アカネ隊員。珍しく物思いに耽っちゃって」
「ホント、メズラシ、メズラシーーイ」

「ちっとも珍しくなんかないわよ、ハック。って、そんなことどうでも良いけどキャプテン、ロススプリングの伝説って、確かに吉原に通じるものがありますね。お金を貰うか否かの違いだけで」
「ん、そうだろう、アカネ……。おっと、もうそろそろ、スピカに到着だ」
　おとめ座のスピカ星に着陸したキャプテンウルトラたちは、そこからまだまだ遥か遠い吉原ステーションのネオンを眺めた。宇宙の闇の中に、吉原のネオンの波また波は相変わらず妖しい光を放っている。
「結局のところ、根本的に売春の何がいけないんだろうね、アカネ隊員」
「はあ、今更何言ってんですか、キャプテン。それは、女性の性を商品にしているからでしょ」
「詰まり、人身売買ってこと」
「言い換えればね。しかも吉原で働く女性たちのほとんどは自分の意思ではなく、無理矢理働かされていまーす」
「そうかな」
「そうですよ。たとえ自ら風俗店のドアを叩く女性がいたとしても、それは高額の借金をしたり、生活苦でお金に困っていたり、この世の中に他に働けそうな仕事がないから。そんな主に経済的理由から、やむなくやって来る人ばかりなんですから」
「そうか」
「愛し合ってもいない男女が関係を持つ。しかもそこに金銭が介在する。こんなことばかりやっているから、第三惑星はちっとも進化しないで、宇宙の進歩からどんどん取り残されていくんですよ」
「アララ、ソコマデイッチャウノ、アカネチャン」
「ハックもまっ青」
「この際だから、わたし思いっ切り言っちゃいます。売春は、この世の中の諸悪の根源でーーす。なぜなら風俗店を裏で牛耳っているのは、反社会的勢力、詰まりヤクザ、暴力団、マフィア、そして警察。そういう連中の活動の資金源になっているんですからね」
「確かにそうかもね。もし第三惑星から売春がなくなったら、やつらおまんまの食い上げだろう」
「そうですとも、キャプテン」
　キャプテンたちは一時議論を中断し、遥か遠い吉原ステーションのネオンを眺めた。
「よし。ではさそり座へと向かうその前に、そろそろ我々としての結論を、出しておくとするかね、アカネ隊員」
「結論、そうですね。いよいよ最後の審判ですか、キャプテン」
「ああ、最後の審判だよ」
　大きく頷くキャプテンウルトラを、じっと見詰めるアカネ隊員。
「さて、どうするべきか。あの売春のメッカ、ヨシワラを存続させるのか、それとも滅亡させるべきか。そしてあの雪という売春婦を許すべきか、それとも……」

　河野の語りの中に突然自分の名が出現し、雪は驚いて目を開けた。

「ちょっと先生、何で行き成り、わたしの名前が出て来る訳。しかもわたしを許すべきかって、どういうこと、それ」
　雪は不満げに、河野にぶつけた。
「まあ、落ち着いて落ち着いて、雪ちゃん。これはあくまでもキャプテンウルトラたちの会話なんだから」
「でもお」
「だったら、彼らがここ吉原に着陸した時、直接聞いてごらん」
「ええっ。でも本当に、本当に来るんでしょうね、プロアデスの宇宙船」
「まだ、そんなこと言ってる。大丈夫、大丈夫」
　河野の答えに安心した雪は、ベッドから腰を上げると、個室の窓を開け夜空を見上げた。街に瞬くネオンライトが眩しくて、星の光はよく見えない。代わりに直ぐそばの電信柱に留まって鳴いていた一匹のあぶら蝉を、雪は眺めた。
　ハイライトの煙をくゆらせながら、河野は語りを再開させた。

　さてさて、キャプテンウルトラたちは再びシュピーゲル号に乗り込むと、おとめ座のスピカ星を後にした。うみへび座、へび座、へび使い座、ってやたらとへび絡みの星座ばかりを通過し、てんびん座も通った後、シュピーゲル号はさそり座へと向かった。
　さそり座。ここが、終着の吉原ステーションに到着する直前にシュピーゲル号が立ち寄る、最後の宇宙ステーションであった。
「でもキャプテン。さそり座なんて、なんか恐そうですね」
「おや、強靭なアカネ隊員が珍しい」
「そんなに強くないですよ、わたし」
「ははは。でもさそり座にはね、第三惑星の日本人なら誰でもが知ってる有名な物語があるんだよ」
「へえ、どんな」
「宮沢賢治の、銀河鉄道の夜、さ」
「それなら知ってます」
　会話が盛り上がる中、シュピーゲル号は無事、さそり座のアンタレス星に着陸した。キャプテンウルトラたちはそこから矢張り、遥か遠い吉原のネオンライトを眺めた。
「その、銀河鉄道の夜、の中に、さそりの祈り、というのがあるんだけど、ご存知かな、アカネ隊員」
「はあ、確か少女時代に読んだ記憶が薄っすらとあるんですけど、もうすっかり忘れちゃいました。どういう話でしたっけ」
「オマカセクダサイ。ワタクシメカラ、ゴショウカイ、イタシマショウ」
「おお、良かったね、ハック。また出番があって」
　照れ臭そうにハックは頭を掻いた。
「イタチニ、タベラレソウニナッテ、ニゲテ、イドニ、オチテシマッタサソリハ、オボレナガラ、コウイッテ、イノッタソウデス。ゲンブンヲ、ソノマンマ、インヨウシマスノデ、アシカラズ」

「そうそう、著作権問題は厄介だからね。引用は引用と、はっきりと明記しなきゃね、アカネ隊員」
「はい。そうですとも、キャプテン。じゃ、続けてハック」
「ドウカカミサマ。ワタシノココロヲゴランクダサイ。コンナニムナシクイノチヲステズ、ドウカコノツギニハ、マコトノミンナノサイワイノタメニ、ワタシノカラダヲオツカイクダサイ。」
「うーん。いつ聴いても、胸に沁みるねえ、アカネ君」
「そうですねえ、キャプテン」
「イツカサソリハ、ジブンノカラダガ、マッカナウツクシイヒニナッテ、モエテヨルノヤミヲテラシテイルノヲ、ミタッテ。イジョウ、インヨウ、オワリデース」
「まっ赤なうつくしい火……」
「キャプテン、それがどうかしましたか」
「ん、今はっと気付いたんだけど。ねえ、このさそりの祈りって、ヨシワラに通じるものがあるんじゃない」
「ええっ。どういうことですか、キャプテン」
　驚いて問い返すアカネ隊員に、思慮深げに腕を組みながらキャプテンは答えた。
「例えばだね『まことのみんなの幸のために私のからだをおつかい下さい』という所なんだけど、これってそのまんま娼婦じゃん、って思うの俺だけ」
「はあ。あなただけです、キャプテン」
　アカネ隊員は呆れたように答えた。
「間違っても娼婦たちは、そんな心境から売春なんてしてませんから」
「じゃあ『いつか蝎はじぶんのからだがまっ赤なうつくしい火になって、燃えてよるのやみを照らしているのを見た』ってところはどう」
「どうって、それの何処がヨシワラに通じているって言うんですか」
「分からないかな、アカネ隊員。あのヨシワラのネオンだよ」
　キャプテンは遥か遠い吉原の風景を見詰めながら、そう答えた。
「あのネオンがどうかしたんですか」
「だから、さそりのまっ赤なうつくしい火とは、ズバリ、ヨシワラのネオンのことなんだよ」
「ええっ、ちょっとキャプテン。そんな暴言吐いてたら、宮沢賢治ファン、銀河鉄道ファンを敵に回しちゃいますよ」
　しかしハックが助け舟。
「ワタシハ、キャプテンノイワントスルトコロガ、ヨークワカリマスデスバイ」

「ねえ、先生」
「ん、どうした、雪ちゃん」
　突然の雪の声に驚いて、河野は宇宙船の話を中断した。雪は河野の隣りに腰を下ろし、尋ねた。
「神様って、本当にいるの」

「えっ、神様」
「うん」
　その時部屋には、ドボルザークの新世界交響楽が流れていた。
「神様かあ」
　河野はため息を零しながら、ハイライトを口にくわえた。
「それは流石のぼくにも分からないなあ。でもね、ぼくってほら、年中星や宇宙のことばかり考えているだろ」
「うん」
「すると地球なんてこの大宇宙の中のたったひとつの星に過ぎなくてさ、地球なんかよりもっともっと大きい星が無数にあるんだな。それから、どうしてこんなに見事にこの宇宙は成り立っているんだろうって不思議に、否神秘的っていうのかな。そんなふうに思えてしまう現象なんかも、それこそ星の数ほどあるんだよ」
「うん。だから」
「だから、この宇宙にはやっぱり、人知を超えた何らかの大きな力とかエネルギー、或いは意思っていうものが多分存在していなきゃ、説明がつかない。そう思うんだよね。だったら、神様がいてもちっともおかしくはないのかも知れないねえ」
「ふーん。でも、じゃもし本当に、この世に神様がいたとしてよ」
「ああ」
「どうして神様って、吉原とか売春婦とかって悪いものを造ったり、許したりしているの」
「えっ」
「さっき、吉原を残すか滅ぼすかとか、わたしを許すべきか、って言ってたでしょう」
「うん、キャプテンウルトラたちが言ってたんだけど」
「わたしなんか、生きてたってしょうがないのよ。自分でもそれは良く分かってるつもりなの」
「おいおい。雪ちゃん、どうしたの」
　河野はじっと雪を見詰めた。しばし沈黙した後、そして河野は答えた。
「きみの質問への答えになっているかどうか分からないけど……そうだな。ひとつだけ言えることはね」
「何、先生」
「今こうしてぼくときみが、ここに一緒にいるっていうこと。これだけは紛れもない事実なんだよ」
　そして河野はほんの一瞬だけ、雪に口付けをした。
「先生」
　珍しく頬を紅潮させ、雪は河野を見詰めた。しかし怒ってはいなかった。
「あっ御免。吉原ではキスは御法度だったね」
「そうよ、先生」
「じゃ今夜ももう時間のようだから、宇宙船の話は、これでお終いにしよう」
「はーい、先生」
「後は宇宙船が、この吉原に無事に来るのを待つだけさ」

「うん、そうね」
　雪は笑顔を作って、幼子のように頷いた。
「それじゃね、雪ちゃん」
「先生、また来てね」
「勿論さ。次は宇宙船着陸の日かも知れないし」
　個室を去ってゆく河野の背中を、雪はいつものように手を振って見送った。また会えると信じて疑いもせずに。

(十二・三) 権藤

(十二・三) 権藤

「よう、雪ちゃん。また来たよ」
「あら、権藤さん。また来ちゃったのね」
　河野の次にやって来たのは、権藤だった。
　初めて雪の前に現れて以降、この男はなんと五日に一回のハイペースでパンドラに来て、雪を指名していた。
「だって俺さあ、雪ちゃんのことすっかり気に入っちまったから。だって雪ちゃん、あれやると、すっごく興奮しまくるじゃん。俺嬉しくて、ついつい来ちまうの」
　あれ、とは勿論脱法ドラッグ、ウルトラ・エクスタシーのことである。雪としてはそんなもの断りたかったが、客の頼みとあっては拒めなかった。
「権藤さん、本当にその薬、大丈夫なの」
「大丈夫、大丈夫。覚醒剤じゃないんだから、心配御無用。中毒にもならないし、禁断症状も絶対起きねえって」
　権藤はきっぱりとそう断言した。それにお節からも厳しく釘を刺されていた。
「あの権藤さんはな、うちの大事な大事なお得意さんなんやから、あんた、くれぐれも失礼のないよう宜しく頼むで」
　これでは権藤に逆らう訳にはいかない。しかし権藤の言う事は明らかに嘘だった。なぜなら雪には、ウルトラ・エクスタシーの禁断症状が現れて来たからである。
　五日に一度来る権藤だったが、その間に雪は段々とウルトラ・エクスタシーへの渇望を覚えるようになった。それが満たされないと、落ち着きを失くしてイライライライラ、情緒不安定に陥った。
「権藤さん。お願いだから、今夜は薬使うの、勘弁して」
　雪は遂にウルトラ・エクスタシーの使用を拒んだ。しかし権藤がそれを許す筈がない。何より雪をドラッグ漬けする為に来ているのだから。
「なんで、どうしたの、雪ちゃん。口では拒んでも、体は拒めないよ」
「嫌だ、体だって拒んでる。だって最近、体の調子が悪いんだもん。きっとこの薬のせいだと思うの。お願いだから勘弁して、権藤さん」
　ここで無理矢理いけば、相手は怖気付く。権藤はソフトに雪をなだめた。
「なあ、雪ちゃん。病気は気から。そりゃ、あんたの気のせいだよ。この薬はね、本当に安全なんだから。それが証拠に、芸能人、文化人、スポーツ選手、多くの有名人が密かにこれを愛用してるんだから」
「ほんと」
「ああ、勿論さ。アイドル歌手、女優さん、お笑い芸人、その他たくさん。でもみんな元気に活躍してるよ」

「例えば、誰」
「例えば……雪ちゃん、言ってみな。思い付く芸能人」
「ええっとね。じゃ、キャプテンウルトラの人とかどう」
「ああ、使ってると思うよ」
「本当。じゃアカネ隊員は」
「彼女も使ってるさ」
「うそーっ」
　どう足掻いても、矢張り権藤とウルトラ・エクスタシーからはもう逃れられない。雪は諦めるしかなかった。
「じゃ、ちょっとだけよ」
「ああ、分かってる」
　いつものように権藤の体を洗ってやり、ベッドルームに移動し早速プレイ開始。権藤から差し出されたピンクの錠剤をふたつ、ゴクンと飲み込んだ。
　すると目が冴えて、体の細胞という細胞が弥が上にも張り詰める。肉体の全域が歓喜に溢れ、歓喜は直ぐに性感へと化学変化を起こした。
　ああ、やっぱり気持ちいい……。
　雪はウルトラ・エクスタシーが脳内に作り出す快感物質に浸らずにはいられなかった。
　しかしそれでも雪は知っていた。ドラッグがたとえどれ程脳内に快感を作り出し、その脳に支配された肉体が抵抗する術もなくただ無条件にセックスマシンと化し、獣のように悶え、どれ程忘我し恍惚として快楽に身を委ねようとも、それでも心の奥にある魂は冷めていることを。すべてが偽りの作り物でしかないことを、雪の中の魂はちゃんと分かっていた。愛する三上との間で交わした関係との歴然たる違いによって、少なくとも明らかに異なる種類の性感であることを。そしてその違いこそ正に、愛の有無に他ならないのだと。
　しかしそんな雪の正確な判断力を、今ウルトラ・エクスタシーという化学物質が破壊せんとしているのも事実だった。
「さあ、雪ちゃん、もっと激しく。さあ、もっともっと気持ち良く」
　更に多くのウルトラ・エクスタシーを雪に与えようとする権藤。
「いや、もう止めて。お願い」
「駄目だ。ドラッグってのは、常用してるとどんどん効き目が薄れて来るもんなんだ。今迄以上の快感を得ようと思ったら、今夜は少なくとも後五錠は飲まないと」
「いや、絶対いや。こんな嘘の快感なんか欲しくない」
　拒み続ける雪に、権藤は遂に本性を現した。
「いいからさっさと飲むんだよ、お姉ちゃん」
　雪の細く白い腕をつかまえると、権藤は雪の顔面を引っ叩いた。雪の鼻から血が滴り落ちる。
「痛い、止めて」
「止めて欲しけりゃ、飲め」
　容赦なく雪を殴る蹴るの権藤。
「止めて、分かったからもう堪忍して」

仕方なく雪は、言われた通り残りの錠剤を一気に飲み込んだ。すると雪の顔面は青ざめ、意識を失いそのままベッドに横たわった。
「あーあ、無茶すっから。ばかな小娘だ」
しかし単なる気絶だけで死ぬまでには至らないことも、権藤は心得ていた。そのまま雪を寝かし、権藤は個室を後にした。
その足で権藤はお節のいる事務室に顔を出し、お節に雪の様子を伝えた。
「今夜はショックが大きかったみたいですから、次はちょっと間を置いて来ます」
「はいよ。ま、宜しゅう頼むわ、あんさん」

意識が戻った雪は個室ではなく、たこ部屋の畳の上に寝転がっていた。そこは、雪のようにパンドラに住み込みで働く泡姫たちの共同部屋であり、広さは十畳程。そこに現在十人が寝ているから、一人一畳という劣悪極まりない狭さなのであった。
雪は起き上がろうとしたが、激しい眩暈に襲われ再び倒れた。部屋には雪以外まだ誰もいなかった。みんなまだ商売の最中であったから。そのまま雪は深い眠りへと落ちていった。
翌日目を覚ますや、ウルトラ・エクスタシーの禁断症状が雪を襲った。既に中毒患者と化していたのである。薬が欲しくて欲しくて堪らない。雪は悶え苦しんだ。その姿を目の当たりにした泡姫たちが、心配してお節に知らせた。飛んで来たお節に雪は飛び掛かるように抱き付き、懇願した。
「お節さん、お願いですから権藤さんを連れて来てくれませんか」
しかしお節は冷たくあしらった。
「なんでやねん。そんなん知らん、あんたの自業自得や」
ウルトラ・エクスタシーの中毒症状は、人の理性を破壊する。雪はお節にすら暴言を吐くに至った。
「何を、このくそババア」
「なんやと。ええ度胸してるやないか」
お節は雪の腕を掴まえ、何度も何度も顔面を引っ叩いた。
「痛い、痛い。お節さん、堪忍して」
お節が去った後も、中毒症状は治まらない。治まる所か更に激しく性欲を掻き立てた。性欲の塊りと化した雪は、客を相手に快楽を貪った。事情を知らない客たちは喜んだが、雪の相手をさせられ、へとへとになって店を後にする有様だった。
パンドラ閉店後も雪の性欲は衰えず、眠りに落ちるまでがまた性欲との闘いだった。他の泡姫たちと共に眠る狭いたこ部屋の隅で、雪は悶え狂いそうな性欲を必死に堪えた。
早く眠りたい。眠ってしまえば、欲望も忘れられる。そう願って目を瞑る雪。しかし目を閉じれば閉じたで、また新たな問題が押し寄せた。それは、幻想である。ウルトラ・エクスタシーの禁断症状から発生する幻影、幻聴、妄想……。
例えば、自分は殺されるのではないかという妄想。お節が企み、ヤクザの男たちに依頼する。男たちは直ぐに雪を殺しに枕元へ。やめてーっ、助けて。わたしまだ死にたくなーーい。

かと思えば、桜毒が悪化してしまうという妄想にも取り付かれる。全身に桜の花びらのあざが拡がり、その醜さに恐れ戦く。誰か、助けて。わたし狂いそーーっ。

気が付けば大絶叫で、たこ部屋の他の泡姫たちを起こしてしまい、大顰蹙を買うのだった。

(十二・四) 三上

(十二・四) 三上

　こんな雪の唯一の慰め、救いは、恋人の三上博だった。
「博、助けて。わたし、おかしくなりそう。ねえ、お願い、博……」
　眠りの中でも博を呼ぶ雪の前に、ようやく三上が現れたのは、八月下旬のことだった。折りしもその晩は、本州に台風十五号が上陸し、関東平野は暴風雨の最中にあった。
　なぜまたよりによってこんな悪天候の晩に、のこのこと三上はやって来たのか。それはこの男、また自暴自棄に陥っていたからである。と言うのも職場での人間関係が上手くいかず、会社を辞めてしまったのだが、なかなか再就職先が決まらなかった。その為狭いアパートで一人悶々としているうちに、とうとうノイローゼ気味に。自己嫌悪に陥り、遂に自殺願望野郎に逆戻りしたという訳である。
　そして縋る思いでパンドラの雪の元へ訪れた。詰まりお互いに相手に依存し合う、似た者同士の脆く弱いふたりだったのである。だから台風なんぞ、一向に気にならない。むしろ台風でびしょ濡れの俺って、なんか悲愴感一杯って感じでいけてね。みたいな乗り。
「ね、どうしたの、博。あんた、びしょ濡れじゃないの」
「雪ちゃん、俺もう駄目だあ」
　雪を見るなり、三上は崩れるように雪の肩に縋り付いた。
「どうしたのよ、博。ね、しっかりして。何でも遠慮なく、わたしに話して頂戴よ」
　そして雪は思った。
　そうだ、良い機会だからわたしも博に、わたしのすべてをぶちまけよう。桜毒のことも、堕胎のことも、そしてウルトラ・エクスタシーのことも……。
　シャワーの後、ふたりは裸のままベッドに腰掛けた。
「俺なんか、ほんとにポンコツの役立たずなんだよ」
「また、そんなことないって」
「いや、本当に俺、人間の屑だから。もう止めちまいてえの、こんな最低の人生なんか。雪ちゃんも俺なんかさっさと捨てて、他に良い男探しなよ」
「嫌よ」
　雪は怒った顔で、三上を睨み付ける。
「そんなの、嫌。わたしは絶対博じゃなきゃ、嫌なんだからね。ほんと嫌だから」
「雪ちゃん」
「ひろしーーっ」
　子猫のように甘えて来る雪を、仕方なさそうに抱き寄せる三上。
「そうだ。実はね、博」
「ん、どうしたの、雪ちゃん」

「わたしの方もいろいろとあってね」
「いろいろと」
「うん。でも、博、心配するから……」
「何言ってんの、水臭いなあ。俺と雪ちゃんの仲じゃん。隠し事なんかしないで、正直に全部話してよ、俺に」
「ごめーん。分かったわ、博。今夜は全部、博に正直に話すから。でも本当にびっくりしないでね」
「ああ、大丈夫だよ」
　見詰め合うふたり。
「でもその前にお願い、博。わたしを思い切り抱いて。だって、ずっとわたし、我慢して来たんだから」
「そうだね、俺だって。よーし、今夜は何もかも忘れて、雪ちゃんの中で昇天するぞお」
　若さ故、野獣の如く燃え上がる三上。しかし雪はそれ以上だった。勿論ウルトラ・エクスタシーの禁断症状から来る性欲の為である。
　女豹のように腰を振り、貪り付き、絶叫する雪に、流石の三上もたじたじ。
「雪ちゃん、今夜のきみって、まじ凄過ぎない。ちょっと恐い位なんだけど、大丈夫」
「だから言ったでしょ、博。わたしもいろいろとあったって。ああ気持ちいい、止めないで博……」
　幾度かの絶頂を迎え、へとへとになって遂にベッドに横たわるふたり。
「実はね、わたし」
　いよいよ雪の告白である。雪は三上の耳元に囁き掛けた。
「なんだい」
「お客さんに、薬飲まされちゃって」
「薬、どんな。シャブとか、やばいやつじゃないよね」
「ちゃうちゃう。でも、ウルトラ・エクスタシーとか言って、ちょっと怪しそうな薬」
「ウルトラ」
「エクスタシー」
「へえ、そんな薬あんだ。一体どうなんの」
「それが凄いの。性欲びんびん、男が欲しくて堪んなくなっちゃう」
「媚薬みたいなもんか」
「それどころじゃない。わたしなんか、最近そのお客さんが来ないから、禁断症状っぽくなってんの」
「やばいじゃん、それ」
「やばいやばい。もう中毒よ、わたし」
「雪ちゃん」
　愛する女が、得体の知れない薬の中毒なんて。心配する三上は雪をじっと見詰めながら、忠告する。
「止めろよ、そんなの。絶対やばいって」
　しかし雪は、悲しげにかぶりを振った。
「わたしだって止めたいよ、博。でも、その客、店のお得意さんなの。だから拒めない」

「雪ちゃーん」
　三上はこうべを垂れ、雪に侘びた。
「ごめん、雪ちゃん。俺に甲斐性がないばっかりに、こんなとこで働かせちゃって」
「博。ううん、いいのよ、博が悪い訳じゃないんだから。お願い、笑って」
「雪ちゃん……。兎に角、体には気をつけてくれよ」
「分かってる」
「薬のことは分かったけど、いろいろあったって言うのは、それだけ」
　問う三上に、雪は続けた。
「他にもあるの。でも……」
「いいから、全部話してくれよ。俺、きみのこと、すべて知っておきたいんだ。ひとりじゃ苦しいけど、ふたり一緒なら。ほら、よく言うだろ、苦しみは半分、喜びは二倍って」
「そうね、分かった。全部、博に言っちゃう」
「うん」
　やさしく頷いてはみたものの、本音は不安一杯の三上。ウルトラ・エクスタシーだけでも充分にインパクトがあったから、次には一体どんな話が出てくるのやら……。

(十二・五) 睡眠薬

(十二・五) 睡眠薬

「梅毒って、知ってる」
「ええっ、梅毒」
　行き成り、それかよ。まじ、びびる三上。
「勿論、知ってるさ。保健の教科書で見たことある。男のあれが、象さんの鼻みたいになってる、あれだろ」
　もしかして、雪ちゃんって梅毒なのか。じゃ、俺もやべえじゃん。
　三上は、恐る恐る尋ねた。小心者のその顔は既に青ざめていた。
「もしかして、雪ちゃん。梅毒」
「えっ、大丈夫よ。心配しなくても、梅毒じゃないから、わたし」
「ほんと。良かった。でもじゃ、何でそんな話」
「梅毒じゃないんだけど、わたし。似たような名前の病気なの」
　あちゃ、やっぱし病気か。
「似たような名前の病気って、何」
「それがね、わたしも知らなかったんだけど。桜毒って病気があるの」
「おう毒」
「そう。わたし、それだって」
「何、それ。うつるの」
「心配しないで、博にはうつらないから。なんでも、性病の一種なのは間違いないんだけど、性行為しても伝染はしないんだって」
「ほんと」
　良かった。内心胸を撫で下ろす、自殺志願の割りに臆病な三上であった。
「でもどんな症状が出るの。やばくないの、その病気」
「やばい、やばいよ、博。梅毒よりやばいかも。だって治療法がまだ見付かってない難病だって」
「何、それ」
「だからこのままだったら、わたし。いい、博。聞いてる」
「聞いてるよ」
「わたし、今年の冬には死んじゃうかもって。しかも発狂してって」
「発狂して……そんな、雪ちゃん。嘘だって言ってくれよ」
「博。嘘、じゃないの」
　見詰め合うふたり。
「分かった。でも俺、雪ちゃん支えるから。冬までずっと、雪ちゃんと一緒にいるから」

「ありがとう、博」
　涙を堪えつつ、ふたりはがばっと抱き合うのだった。
「ね、博。もうひとつ、あんの」
「ええっ」
　博の胸に顔を埋めながら、雪は続けた。
「わたし、実は博の子、身ごもったの」
「え、えっ」
　最大級の驚きで応える三上。
「身ごもったって。いつ、いつだよ。もしかして今、いるの、俺の子、きみのお腹ん中」
「慌てないで、博。実はね」
　急に雪は、涙声になった。
「ごめんね、博。わたし、その子、堕ろしちゃったの」
　おろしたあ。
　三上は頭の中がまっ白になった。
「店の人に見付かって。どうしても堕ろせっって、脅されちゃって」
「雪ちゃん。ごめん、謝るのは俺の方だよ。だって俺、ほんとに何にも知らなくて。きみにばかり、苦労させて来たんだね。ほんと俺、下らねえ男なんだから。自分でも情けなくて、泣けてきちまうよ」
「ひろしい」
　涙に濡れながら、再び熱く抱擁し合う若きふたりだった。
「きみって子は。ほんとに世の中の苦労をすべて背負い込んだような、辛い思いばっかりして来たんだね。ほんと、いい子いい子」
「博こそ、やさしい人なんだから。わたし、博に会えて、ほんと幸せ」
「幸せって、雪ちゃん」
　ほんの一瞬でも、雪と三上は今幸福の絶頂にあった。
「博だって、一杯辛いことあったんでしょ」
「まあね。雪ちゃんには、とても敵わないけど。そうだな、俺たちって、やっぱ、似た者同士なんだね、雪ちゃん」
「そうよ、わたしたち、似た者同士。うふふ」
　固く手を握り合い、見詰め合う、今この時。しかし三上の顔から笑いは消え、真剣な眼差しを雪へと向けた。そして決心したように、三上はぼそっと零した。
「雪ちゃん。似た者同士、だったら、こんな世の中から、俺たち一緒に、おさらばしないか」
「ええっ。今なんて言ったの、博」
　生唾、ごっくん。実は聞き取れたけど、雪は確かめずにはおれなかった。
「だから、死んじゃおう、ってこと。俺たち」
「博」
　しばらく黙った後、雪は口を開いた。
「わたしたち、死ぬの」
「うん。その方が絶対いいって」

「心中するってこと」
「そう。心中」
　若きふたりの声は震えた。
「こんな人生なんか、生きてたって仕方ないだろ。一緒に死んで、先に死んじゃった俺たちの子どものとこ、行こうよ」
　悲しげに笑い掛ける三上。
「子ども。博ったら」
　けれど雪はにこっと、三上に笑い返した。
「そうね、いいわよ、博。どうせ、わたし、冬には発狂して死んじゃうんだから。だったら今、博と一緒に」
「雪ちゃん」
「博がその方がいいんだったら、わたし黙って博に付いてゆく。だって、ひとりで死ぬの恐いし、寂しいでしょう」
「そうだよ」
「博、さっき言ったよね。苦しみは半分、喜びは二倍って」
「ああ、言った。ふたりなら、苦しみは半分、喜びは二倍」
「ほんと、その通りね。じゃ、死にましょう、ふたりで」
　雪は頷き、三上の手をぎゅっと握り締めた。ふたりの手は、汗びっしょりに濡れていた。
「わたしたちふたりは、どこまでも一緒よ。ね、ひ・ろ・し」
「うん、そうだよ、雪ちゃん」
　こうして若きふたりは、心中の意思を固めたのだった。
「でも、どうやって」
　問う雪に、三上はやさしく微笑み掛ける。
「薬、持って来たんだ」
「やだ、博ったら、準備いいんだから」
　三上は持参したバッグから、大き目のビンを取り出した。中には白い錠剤が一杯詰まっている。そのラベルには、スリアデス、と記されてあった。
「ス・リ・ア・デ・ス」
　雪がゆっくりと恐る恐る読み上げると、三上は頷いた。
「睡眠薬。この中に二百錠以上は入ってる筈」
「そんなに」
「ああ。流石に一気に百錠も飲めば、確実に死ねるんじゃない」
(※実際には死ねません)
　ごくん。雪も三上も生唾を飲み込む。全裸のままで死んだら発見された時かっこ悪いねと、ふたりは服を着た。
「じゃ、雪ちゃん。いいかい」
「うん」
「じゃ、俺から」

三上が先に一錠口にし、続けて雪が一錠を口にした。見詰め合い、微笑み合いながら、そして一錠また一錠とふたりは続けて口の中に入れ、ごくんと飲み込んでいった。眩暈と吐き気がしたが、ふたりは励まし合って堪えた。

直ぐに眠気が襲い、一緒にベッドに横たわった。

「博」

「雪ちゃん」

ふたりは手に手を取って、瞼を閉じる。

ああ、これでもう、すべてが終わるのね。苦しいだけのわたしの人生……。ああ、よかった。

雪の頬に笑みが零れた。愛する三上の鼓動を感じながら、死の眠りへと今、雪は落ちてゆく……。

ところがその時、予想もしないノイズが雪の耳に届いた。

「ワンワン」

しかもそれは、聞き覚えのあるタロ吉の吠える声ではないか。雪はうろたえた。

なんで、タロ吉の声なんかが聴こえるの。もしかして幻聴。

「ワンワン」

しかし確かにタロ吉の声は聴こえた。

間違いない、タロ吉だわ。でもどうして、こんな近くで。丸でパンドラの建物の中にでも、いるみたい。

動揺した雪は、はっと目を開いた。横を見ると、目を瞑った三上が微動だにせず横たわっている。その疲れた老人のような顔は、深い眠りの中にあるように安らかだった。しかし彼の鼓動はまだ続いている。雪は三上の鼓動を感じながら、辺りを見回した。

(十三)

(十三・一) 夏の終わり

(十三・一) 夏の終わり

「……宇宙船は行ってしまった。疲れ切った男たちと、売春婦たちの顔を眺めているうちに。お腹空かしたタロ吉と、ぼくを残して……」

わたしは、パンドラの裏口の前に立っていた。ひとり、宇宙船のお祈りを唱えながら。それはしかし雪さんが作ったものでは既になく、わたしが勝手に作り替えたものだった。

わたしの隣りには、びしょ濡れのタロ吉がいた。わたしも同様にびしょ濡れだった。なぜなら台風十五号が、関東地方そしてこの吉原の街に上陸している、正にその真っ只中にいたからであった。

家を出る時はまだ傘を差していたけれど、それも強風に吹き飛ばされて、今は行方知れず。ただびしょ濡れに濡らされるまま、わたしはじっとパンドラの建物を見上げていた。

吉原は既に夜と暴風雨の中に沈み、街全体が暗黒のベネチアの如く水の中に浮かんでいる有様だった。ネオンライトもただ黙々と、雨粒にぬれるばかり。こんな狂ったような宵でも欲望に駆り立てられた客はいるらしく、ぽつりぽつりとパンドラの部屋の窓に灯りが点っていた。

あの中の何処かに雪さんがいる。わたしはそう信じて疑わなかった。あの瞬きのひとつの下で、今雪さんはひとりの男と一緒にいる。そしてわたしは、その男が例の雪さんの恋人なのではないかと思わずにはいられなかった。

カーッと、わたしの胸は熱さを覚えた。嫉妬、それ以外の何物でもなかった。わたしの胸はぎゅっと締め付けられた。

なんて苦しいんだろう、これが恋というものなのか。

嫉妬がわたしを突き動かし、今わたしは台風のドサクサに乗じてパンドラへの侵入を決行しようとしていた。子どものわたしがそれをやるには余りにも無謀で危険だったが、嫉妬はわたしを盲目にした。

よーし、今夜こそ、ひろしの顔を見てやるからな。

台風の起こす狂ったような雨と風、そのノイズがわたしの背中を後押しした。

今夜を逃したら、もうチャンスはないかも知れない。

ごくり。唾を飲み込み、わたしは一歩を踏み出した。恐る恐る、パンドラの裏口のドアの丸い取っ手を握ったのである。錆び付いたそれも、雨粒に濡れていた。

その時、タロ吉が小さく吠えた。

「ウウ、ワン」

「どうした、タロ吉」

見下ろすと、何か訴えるような眼差しをわたしに向けている。雨に濡れたその瞳で、じっとわたしを見詰めているタロ吉。

「おまえも一緒に、行きたいのかい」
　小さくわたしが問い掛けると、タロ吉は嬉しそうに尻尾を振った。
「わかったよ、じゃ一緒に行こう」
　わたしとしても一人より、タロ吉と一緒の方が何かと心強かった。この小さな野良犬がいざとなったらわたしを守ってくれる、そんな気がしてならない。今のタロ吉の存在はわたしにとって唯一無二の親友と呼んでも、決して大袈裟ではなかった。
「よし、行くよ、タロ吉」
　頷くわたしを、タロ吉は無言で見詰め返した。
　再びドアの取っ手を握ると、わたしは一気に回した。施錠されておらず、ギィーという錆び付いた音と共にドアは開いた。目の前はもう、パンドラの店の中である。視界には廊下のような所が広がり、天井の灯りが眩しかった。じっとしていると、雨と風がどんどん中に入って来る。急がなければ。
「おいで」
　わたしは急いでタロ吉とパンドラの中に入り、ドアを閉めた。ドアはバシッと音をたてたが、暴風雨のお陰で気にする程のものではなかった。
　もっと緊張するかと思っていたが、意外にわたしは落ち着いていた。廊下の様子を窺うと、人影も人の気配もない。ほっとしながらわたしは、タロ吉と見詰め合った。
　ところがである。突然、廊下の照明が一斉に消えてしまった。辺りはまっ暗闇に沈んだ。台風による停電なのだろうか。どうしよう。わたしは様子を窺いながら、電気の復旧を待つことにした。
　視界が段々と闇に慣れてゆくに従い、わたしの前に、詰まりパンドラの闇の中に、ぽつりぽつりと何かが瞬き出すのが見えた。
　何だろう。
　それは、小さな瞬きだった。丸で夜空に瞬く星のように見えた。いや星のように、ではなく、正にそれは星々の瞬き、そのものだった。
　何だ、これは。
　詰まりパンドラの中は、宇宙空間につながっていた。もっと言えばパンドラそのものが、宇宙空間の闇、だったのである。

　今タロ吉とわたしは、宇宙空間の闇の上に立っていた。まっ暗闇の中に、星々の瞬きだけが頼り。わたしは上野で見た見世物の、お化け屋敷の小屋を思い出さずにはいられなかった。
　パンドラは、お化け屋敷なのだろうか。
　わたしは恐くなったが、足元にいるタロ吉の存在がわたしを勇気付けた。
　いや、やっぱり吉原は第三惑星の宇宙ステーションで、パンドラはその中の、そうだ、司令室に違いない。司令室、かっこいい。
　わたしは胸をわくわくさせながら、今目の前に広がるパンドラの闇を改めて見回した。わたしはパンドラの宇宙空間に見入った。神聖な思いが、わたしの心を包み込んだ。雪さんの部屋を捜すという本来の目的を忘れ、わたしはわたしがこの宇宙の中に何か大き

な使命を持って生まれて来たのではないかと、そんなことを想い描いた。例えばキャプテンウルトラのように……。

「ワン」

しかしタロ吉の声で、わたしは我に返った。

「ごめん、ごめん。じゃ、雪さんを捜そう」

タロ吉にはそう告げたが、内心わたしはこう思っていた。

よし、宇宙ステーションの司令室を探検するぞ。

わたしはタロ吉と共に、パンドラの宇宙の中を歩き出した。宛てなどない。しかし恐さはなかった。

クンクン、クンクン。雪さんのにおいを捜しているのだろうか。タロ吉はわたしを先導し、どんどん進んでいった。足元は、コンクリートのように硬く冷たい。星々の中を進んでゆくと、やがて音楽が流れて来た。それは放課後の小学校の校庭や教室に鳴り響く、あの、ドボルザークの新世界交響楽だった。

タロ吉とわたしは、パンドラの宇宙の中を彷徨い続けた。欲情した男たちの体臭、売春婦たちの化粧と香水、芳香剤、石鹸、黴臭さ……。流石のタロ吉の臭覚も、特殊浴場独特のにおいに眩惑され、雪さんのにおいを見付け出すのに苦労しているらしかった。

「……とうとう宇宙船は行ってしまった。お腹を空かしたタロ吉と、桜毒の雪さんを残して。どうせなら、奇蹟のひとつでも起こしてゆけばいいのに……」

わたしはタロ吉を落ち着かせるように宇宙船のお祈りを唱えた。するとパンドラの宇宙空間が、突如螺旋状に渦をなしたかと思うと、渦の中心にプレアデス星団が出現した。アルキオネ、アトラス、メローペ、プレイオネ、アステローペ、ケラエノ、エレクトラ……プレアデス星団の星々が輝く。

続いて幾多の星座が姿を現しては、消えていった。牡牛座、オリオン座、やまねこ座、おおぐま座、しし座、こぐま座、きりん座、ペルセウス座、カシオペア座、アンドロメダ座、とかげ座、ケフェウス座、りゅう座、白鳥座、わし座、こと座、おとめ座、うみへび座、へび座、へび使い座、てんびん座、さそり座……。

そしてパンドラの宇宙空間に、遂に我等が銀河系が現れ、太陽系が現れ、地球が現れた。同時に宇宙船の姿が見えた。それはシュピーゲル号だった。

タロ吉がシュピーゲル号の後を追い掛ける。わたしも付いてゆく。プラモデルのようなシュピーゲル号が向かう先に、ひとつの部屋のドアが見えた。その部屋の前だけ、なぜか雪が降っていた。白い白い粉雪が舞い落ちると、パンドラの宇宙の闇へと吸い込まれ、融けていった。

わたしとタロ吉がその部屋のドアの前に辿り着くと、シュピーゲル号は姿を消した。タロ吉はドアの前にしゃがみ込んだ。

「ワンワン」

それからタロ吉は、わたしに合図を送るように吠えた。

「しーっ。中の人に聴こえるよ」

吃驚したわたしは急いでしゃがむと、タロ吉の頭を撫で回した。しかし時は既に遅かった。粉雪が降り頻る部屋のドアが開き、中から誰かが顔を出したのである。

それは、雪さん、だった。

おねえさん……。

わたしは息を呑んだ。その部屋は雪さんのいる部屋だったのだ。タロ吉とわたしは、パンドラ侵入の目的をあっさりとクリアしてしまったという訳である。

「にいさん」

わたしとタロ吉を見付けるなり、雪さんは声を上げた。しかし弱々しい、震えるような声だった。よく見れば、雪さんの顔は死人のように顔面蒼白だった。

「やっぱり、にいさん。タロ吉も一緒に。何してんの、こんな所で」

雪さんの声は怒ってなどいなかった。むしろやさしくさえあった。それに何処かぼんやりとして、丸で夢の中から囁き掛けてでも来るような、そんな声でもあった。それに今目覚めたかのように、目もぼんやりとしていた。服はパンドラの制服で、いつもの雪さんの姿と変わりはなかったけれど。

「兎に角、にいさんとタロ吉。中に入って。人に見られたら、大変だから」

「うん」

あんなに降っていた粉雪は、いつか止んでいた。わたしは雪さんに素直に従った。大人しく付いて来るタロ吉と一緒に、雪さんのいる部屋の中へと遂に足を踏み入れた。

(十三・二) 宇宙ステーション

(十三・二) 宇宙ステーション

うわあ、眩しい。

思わずわたしは、手で目を塞いだ。なぜならそこは、その雪さんの部屋の中は、目映いネオンライトに照らされた宇宙ステーションだったからである。詰まりここが第三惑星即ち地球上に於ける、吉原宇宙ステーションの入り口という訳。

部屋の中即ち宇宙ステーションの様子は、例えばキャプテンウルトラのシルバースターに似ていた。宇宙ステーションとして、それなりの国際規格ならぬ宇宙規格とでも呼ぶべきものが存在するのかも知れない。

部屋の中を見回すと、ダブルベッドがあり、その上に一人の男が目を瞑り横たわっていた。その男はキャプテンウルトラの中に出て来た、キケロ星人ジョーに似ていた。或いはガロのマーク。男の肉体は既に永久の眠りに就いて、魂だけがキケロ星に帰還してしまったのかも知れない。と、そんなことを思わせる程、男の眠りは深く、目を覚ます気配など一向に感じられなかった。

男をじっと見詰めるわたしに、雪さんは告げた。

「にいさん、この人がわたしの恋人」

恋人。そーか。

わたしはごくんと、生唾を呑み込んだ。

そーか。こいつだったのか、わたしの大事な雪さんを独り占めしている男は。

しかしそれ以上に、雪さんの次の言葉がわたしに衝撃を与えた。

「でも、ふたりして死のうとしてたの。もうこの人、死んでるかも知れない」

「ええっ」

「わたしも後を追って、直ぐに死ぬのよ。いい、にいさん」

黙ったまま俯くわたしに、雪さんは続けた。

「だから言ったでしょ、こんなとこ来ちゃ駄目よって。なのに、にいさんたち来るから……」

雪さんは悲しげに、かぶりを振った。雪さんの恋人に対する嫉妬心は、既にわたしの中から消え去っていた。もう死んでいるからなのかも知れなかったが、それ以上にわたしの胸の中にもっと神聖なるものが宿っていたからである。

「アカネ隊員、あなたを助けに来ました。シュピーゲル号に乗って、一緒にアルキオネへと旅立ちましょう」

わたしは雪さんに向かって言った。すると雪さんはポカーンとした顔で、わたしを見詰め返した。

「なに言ってんの、にいさん」

しかし気にせず、わたしは続けた。
「ぼくがキャプテンウルトラで、おねえさんがアカネ隊員、そしてタロ吉がハック。タロ吉だって、もうこれ以上大きくなったら、吉原にはいられなくなるから」
「あらあら、にいさん、頭、大丈夫」
その時、部屋の窓に異変が起きた。それはドボルザークの新世界交響楽が、再び部屋の中に流れ始めた瞬間でもあった。
それまで隣接する雑居ビルのネオンの光を映していた窓ガラス。突如その一面が、ネオンライトとは明らかに異なる異様に眩しい光によって、覆い尽くされたのである。
驚いたわたしはその光の正体が何なのかこの目で確かめたくて、急いで窓を開け、頭を突き出した。
するとどうだ。台風に襲われ雨風に曝された吉原の街が、丸で真昼間の如く、夜の闇の中に煌々と輝いているではないか。そしてよく見るとそれは、天空から発せられる巨大な光によって、吉原の街全体が照らし出されていたからであった。
ではその、天空から発せられる巨大な光とは一体何か。わたしは頭上を見上げ、それを確かめた。それは、雷だった。
ピカピカピカッ……。
稲光が曇った大気を伝って、この地上へと落ちて来る。しかもそれが、次々に連続して光り続けていたのである。それはあたかも真夏の太陽の如く、突き刺さるような眩しさだった。
余りの眩しさに、思わずわたしは手で目を覆った。ところがいつの間にかわたしの隣りに立っていた雪さんが、例の稲光に向かって指差しながら、わたしにこう言った。
「にいさん、ほら、宇宙船」
えっ。
わたしは驚いて、雪さんを見詰めた。
違うよ、あれは雷なんだよ、おねえさん。
わたしはそう言い返したかったのだが、出来なかった。なぜなら雪さんはそれは嬉しそうに微笑みながら、ぼんやりと稲光を眺めていたからである。
言い返す代わりに、わたしは雪さんに答えた。
「おねえさん、本当。おねえさんには見えるの、宇宙船の姿が」
「うん。見える、見えるわよ、にいさん」
雪さんは頷いた。
「にいさん、ほら、見える。わたしには、ちゃんと。嬉しいわ、本当に来てくれたのね、宇宙船。わたしの、わたしとにいさんの宇宙船」
雪さんはにっこりと微笑んだまま、愛しげに稲光に見入っていた。
「おねえさん……」
わたしは雪さんが心配でならなかった。大丈夫だろうか、おねえさん。何だか頭のおかしい人のように思えてならない。釣られてわたしも、夜空を見上げた。
台風による暴風雨は、いつのまにか収まっていた。吉原の夜は今、静寂に覆われている。台風が小休止でもしているのだろうか、それとも消滅してしまったのか。
雪さんは更に続けた。

「にいさん、雪よ」
「雪」
「だから、雪が降り出したのよ」
「何処に。ぼくには全然見えないよ」
　真夏に雪など降る筈がない。電信柱に留まったセミたちの声すら聴こえるというのに。いよいよ雪さん、大丈夫だろうかと、わたしは心配で雪さんを見詰めた。けれど雪さんは嬉しそうにはしゃぐばかり。
「また雪が見れるなんて思ってもいなかった。ほんと、嬉しい。ああ、また田舎のこと思い出しちゃう。太郎吉は元気でいるかしら」
　何処に雪が降っているのだ。雪さんは視覚もおかしくなり、幻想でも見ているのではあるまいか。
　心配するわたしを尻目に、雪さんははしゃいでいる。
「宇宙船、きっと空の上で迷っているのよ、にいさん」
「迷っている」
「うん。吉原を滅ぼすか、それとも残すか。そしてわたしを許すかどうか」
「おねえさんを許すかどうか」
「そうよ」
　雪さんは頷き、夜空の彼方の銀河を見上げた。そして雪さんは想い描く。

　今シュピーゲル号の中で、眼下に広がる吉原のネオンの海を眺めながら、腕を組み、迷い悩むキャプテンウルトラの姿を。やがて彼は吉原から目を離し、頭上に輝く銀河を仰ぎ見ながら、こう呟く。今彼、キャプテンウルトラはその想いを、創造主の境地に至らせながら……。
「この宇宙に生きとし生けるものみなに、ただ喜びを与えんとして、夜空に灯したる幾千の星々、この麗しき銀河の瞬く夜に、など人は悲しき罪を重ねしか、我はただ清き愛の秘め事と安らかなる眠りの為にこの夜を、人に与えし筈なれば……。我は今、最後の審判を執り行う。この青く美しき海の星、第三惑星、そして吉原宇宙ステーションに、裁きを下す……」
　我に返ったキャプテンウルトラの頬に、吉原の七色のネオンが妖しく映る。地上の風がふとシュピーゲル号内に紛れ込み、キャプテンウルトラの頬を撫でてゆく。するとはっとして彼はこう思った。
「しかし男と女を創造したのも、恋やら愛やら、そして快楽、エクスタシー、恍惚などというものを創造したのもまた、創造主なり。そして売春を、吉原を、風俗産業を創造したのも、結局は創造主に他ならないではないか……。ならば。ならば我々も、それに従うしかあるまい」

　雪さんはにこっと笑みを浮かべながら、雷の轟音と閃光が続く夜空を見上げた。
「おねえさん、大丈夫」

　尋常ではない雪さんの様子に心配したわたしに、けれど雪さんは冷たく答える。
「どうして、にいさん。おねえさんなら大丈夫よ。それよりにいさん、どうやら宇宙船は、わたしと吉原を、許してくれたみたいね。良かった」
「ほんと」
「ほんとよ。ほら、宇宙船がわたしたちを呼んでいるわ。ねえ、にいさん。早く行かなくちゃ、乗り遅れちゃう」
　そう言うと雪さんは、部屋のドアへと向かい、ふらっと歩き出した。
「おねえさーーん」
　雪さんを止めようと呼ぶわたしの声に、タロ吉も呼応して吠えた。
「ワン、ワンワンワン」
　それでも雪さんは振り向きもしない。
「行かないで、おねえさん。外は激しい雷なんだよ」
　しかし雪さんは振り向いて、にこっと笑った。その手は既にドアの取っ手を掴んでいた。
「なに言ってるの、にいさん。雷なんかじゃないってば。あれは、宇宙船。わたしたちの宇宙船でしょ」
「違う。違うよ、おねえさん」
　わたしは泣き出しそうな声で叫んだ。が時は遅し。勢い良くドアを開けるや、雪さんはそのままひとり駆け出したのだった。
「ワンワンワン」
「待って、おねえさん。宇宙船なんか、何処にもいないんだよ。おねえさんが見てるのは夢。おねえさんは、悪い夢を見ているだけなんだよ」
　叫びながらわたしは、タロ吉と共に雪さんの後を追った。
　さっきまで宇宙空間だった筈のパンドラの廊下は、灰色のコンクリートと化していて、タロ吉とわたしの足音だけが響いていた。雪さんは一階まで駆け下りると、パンドラの入り口前に立っていた。追い付いたタロ吉とわたしに、雪さんはやっぱりにこっと笑い掛けていた。
「さあ、にいさんとタロ吉。みんなで一緒に、アルキオネに出発しよう」
「だから、おねえさん。宇宙船なんか何処にもいないってば。しっかりしてよ、おねえさん」
「ワンワンワン」
　すると雪さんは、いつもの青ざめた悲しげな顔になって零した。
「じゃあ、にいさんたちは行かないつもりなのね、アルキオネ」
「違うよ、おねえさん。行きたいけど、宇宙船が来なきゃ行けないから」
「分かったわ、にいさん」
「何が分かったの」
　しかしわたしの問いには答えず、雪さんは行き成りわたしの前にしゃがみ込んだ。かと思うと次の瞬間、雪さんは自分の唇を、わたしの汗ばんだ額にさっと押し当てた。
　余りに突然の出来事に、わたしは眩暈を覚えた。しかし夢はほんの一瞬で終わった。
　雪さんは直ぐに唇を離すと、しゃがみ込んだままわたしを見詰めながら、笑い顔を

作った。
「にいさん、汚い唇でごめんね」
　汚い……。
　それから雪さんは直ぐに立ち上がるとドアを開け、呆然と立ち尽くすわたしとそしてタロ吉を残し、ひとりパンドラの外、吉原の街に出ていった。
「おねーさーーん」
「ワーーン」
　わたしもタロ吉も雪さんを呼ぶ為に絶叫した。しかし雪さんが振り返ることはなかった。
　見上げると、空一面に巨大な龍の如き不吉な稲光が走った。かと思うと直ぐにドカーンと落雷の音が、吉原の街全体に轟き渡った。
「ぎやーーーっ」
　そしてほとんど同時に、若い女の悲鳴が辺りに響き渡った。それは紛れもなく、雪さんの声だった。
「ワン、ワン、ワン」
　続けてタロ吉の吠える声が、わたしの耳に届いた。それはとても悲しい響きをしていた。
　見るとタロ吉はいつのまにか、路上に倒れた雪さんのそばにいた。丸で寄り添うように。哀愁を帯びたタロ吉の声は、吉原の街に木霊した。
　なぜ雪さんは倒れていたか。それは、落ちた雷に当たったからである。台風が息を吹き返したかのように、再び暴風雨が始まった。吉原は街もネオンもみんな、雨でびしょ濡れになった。
「……もう灯りは消してもいいだろう、みんな眠りに就いたから。宇宙船も、帰っては来ないだろう。もう眠りに堕ちてもいいんだよ、ベッドには雪さん、ただひとり。もう男たちは誰も襲いかかったりしないから。怖ければ、タロ吉を抱いていればいい……」
　わたしは宇宙船のお祈りを唱えながら、横たわる雪さんの姿を眺めた。透き通った冷たい雨が、雪さんの体を濡らしている。空はまっ暗になり、蝉の声も聴こえず、吉原も雪さんの体もみんな、夜の闇の中に沈んだ。ただチカチカ眩しいネオンライトだけが、妖しく瞬いているのみ。やがて救急車の赤いサイレンの音だけが耳に響き、路上に倒れた雪さんの体を何処かへと連れ去っていった。あっという間の出来事だった。
　後には、びしょ濡れのタロ吉とわたしだけが残された。わたしは宇宙船のお祈りの、残りの部分を唱えた。しゃがみ込み、タロ吉の頭を撫でながら。
「ぼくをここに連れて来たのは、タロ吉。ぼくなら、雪さんを助けられると思ったんだな。もしもあの宇宙船が、雪さんを助けに来る夢を今夜見たならば、雪さんは行ってしまうかい。この悲しき、宇宙ステーションを残して」
　雪さんはきっと、無事宇宙船に乗り、アルキオネに旅立ったのだ。プレアデスの宇宙船は、雷の光を使って雪さんの魂だけを吸い上げ、ここ第三惑星の宇宙ステーションから連れ去ったのだ。なぜなら異星であるアルキオネで生きてゆくのに、この星の生物の肉体は余りにも原始的過ぎるから……。
　そう思った時、わたしの目から涙が溢れ出した。涙は頬を伝い、やがて台風の雨に溶

けていった。
「ワン」
　わたしの涙に驚いたタロ吉が、ざらざらの舌でペロペロとわたしの頬を舐めた。それはもうやさしくやさしく、舐めてくれたのだった。
（了）

終わりに

終わりに

お読み頂き、ありがとうございます。

宇宙ステーション・昭和編

著　　SKY BLUE

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社